



## 第5回 コンソーシアム総会 議事次第

日 時：令和7年5月28日（水）10時30分～（1時間半程度）

場 所：ZOOM会議

- 開会挨拶（統計数理研究所 所長 山下 智志）
- 来賓挨拶（文部科学省研究振興局学術基盤整備室 室長 土井 大輔）
- 議 事
  1. コンソーシアムの令和6年度（2024年度）事業報告について
  2. コンソーシアムの令和7年度（2025年度）事業計画について
  3. 今後のコンソーシアム活動のあり方について
  4. その他
- 配布資料
  - 資料1 令和6年度（2024年度）事業報告
  - 資料2 令和7年度（2025年度）事業計画
  - 資料3 統計エキスパート人材育成の強化に向けて  
-今後のコンソーシアム活動の方向について-
  - 参考1 2025年度運営委員会の体制
  - 参考2 特別会員の追加等（コンソーシアム規約別表の一部改正）
  - 参考3 第5回総会 参加者一覧
  - 参考4 第4回総会 結果概要

資料1



統計エキスパート人材育成コンソーシアム  
Consortium for training experts in statistical sciences

# 令和6年度（2024年度）事業報告

令和7年（2025年）5月28日  
統計数理研究所  
大学統計教員育成センター

# I 事業報告作成の目的・留意点

- 参画機関の取組を含めた本コンソーシアムの事業報告については、コンソーシアムHPにおいて公表し、活動の対外的な周知を図るとともに、文部科学省に提出する「成果報告書」の基礎資料としても活用
- この成果報告書においては、コンソーシアムの目的や令和6年度（2024年度）の事業計画と、参画機関を含めた実施内容に加えて、**事業の中間評価結果の留意事項に関する対応状況やプロジェクト選定結果通知における指摘事項への対応状況**についても記載が求められているところ

## II 令和6年度（2024年度）成果報告書の構成案

### 1. コンソーシアムの目的

- ・ 目標・計画の概要
- ・ 取組の概要

⇒ プロジェクト応募申請様式のうち、様式1の「目標・計画の概要」及び「取組の概要」を転記

### 2. 2024年度の実施内容

#### 2-1. 2024年度の事業実施計画

⇒ 令和6年度（2024年度）交付申請書別紙の「4.本年度の事業の項目及び内容」（①～④）を転記

#### 2-2. 実施内容（成果）

#### 2-3. プロジェクト選定結果通知における指摘事項への対応状況

⇒ 令和6年度（2024年度）交付申請書及びプロジェクト選定結果通知における指摘事項への対応状況について、**具体的な成果・対応状況を記載**

#### 2-4. 実施体制

⇒ プロジェクト応募申請様式のうち、様式1の「II-2.実施体制」を更新して記載

### 3. 参画機関における活動内容

⇒ 参画機関から提出される成果報告書を転記

# 1. コンソーシアムの目的

- データ駆動型研究の進展に伴い、統計的素養を必要とするリアルタイム・ビッグデータ解析等へのニーズが増大。
- しかし、多数の統計学部から多くの専門人材を輩出する諸外国に比べ、我が国では、**高度な統計学のスキルを有する人材は極めて少ない。**

- 統計数理研究所を中核機関とし、全国の大学等を参画機関とする「**統計エキスパート人材育成コンソーシアム**」を形成。
- 参画機関の若手研究者を「大学統計教員育成研修」に参加させ、令和7年度（2025年度）年度までに、質保証された**大学統計教員を30名以上育成**。
- 各参画機関に統計エキスパート育成システムを整備し、令和12年度（2030年度）までに、大学院等でおおむね**500名以上の統計エキスパートを育成**。

**大学統計教員** : 専門の学術領域で博士の学位を有し、大学院修士学生等に対して統計学の講義や統計活用研究の指導を行うことのできる人材。

**統計エキスパート** : 統計を駆使して学術研究や産業界等に貢献できる人材。  
このプロジェクトで育成するのは、諸科学分野の大学院修士学生等の統計エキスパート。

# 2-1,2-2. 令和6年度（2024年度）事業の計画・実施内容

## （1）コンソーシアムの運営

### 【令和6年度（2024年度）事業実施計画の概要】

- ◆ 「コンソーシアム総会」（年1回開催）及び「コンソーシアム運営委員会」（四半期ごとに開催）を中心とする適切なマネジメントの下で、コンソーシアム参画機関において統計エキスパートを育成するとともに、その育成状況の把握に着手。
- ◆ また、参画機関の積極的な協力の下、成果報告書における参画機関の取組状況報告やコンソーシアム・ワークショップ（令和6年（2024年）8月～9月）の充実に努め、参画機関ごとの特性を踏まえた統計エキスパート育成の取組を支援。

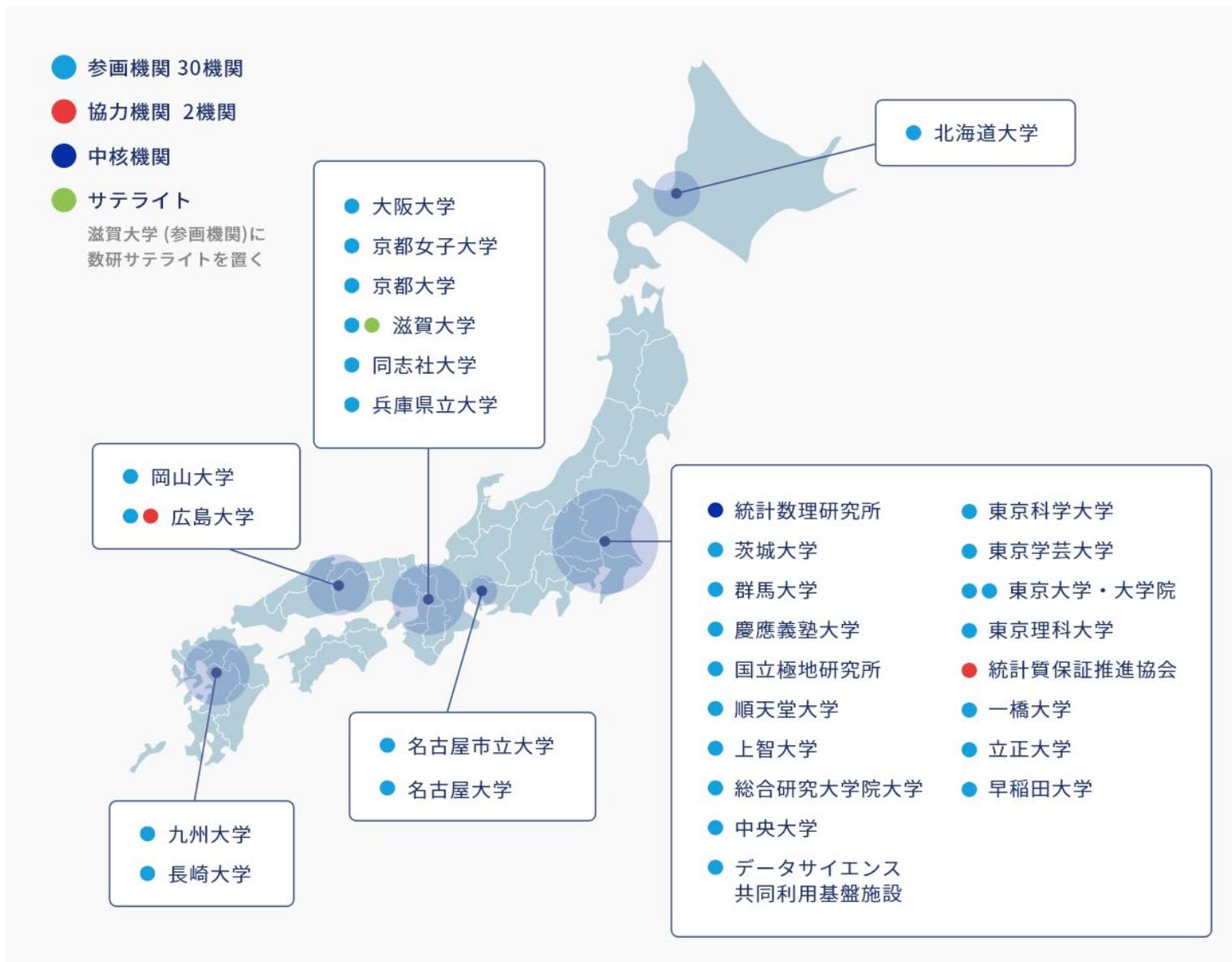
- 運営委員会（メール審議・委員懇談会を含めて6回開催）のマネジメントの下で、会員機関と密接に連携した次の取組を通じて参画機関における統計エキスパート育成システムの構築・推進を支援するとともに、参画機関における令和6年度（2024年度）の「統計エキスパート」育成状況を把握。
  - i）「**第4回総会**」（令和6年（2024年）5月28日）において、参画機関の特性に応じた取組状況を共有。
  - ii）幅広く参加可能な「**第4回ワークショップ**」を開催（令和6年（2024年）9月9日）し、産官学におけるデータサイエンス人材の育成状況や課題等を共有。
  - iii）**統計関連学会連合大会企画セッション**（令和6年（2024年）9月5日）や日本統計学会会報（令和7年（2025年）1月31日）、コンソーシアム・ホームページ（会員サイト）等における本プロジェクト・研修成果の発表・共有。
  - iv）研修修了生については、コンソーシアム「**特別会員**」（個人会員）として引き続き支援。
- 協力機関から参画機関への移行（1機関）により、**参画機関は30機関（法人ベースで28機関）**と着実に拡大【参考1】。また、大学統計教員育成研修の**育成対象者（第1期～第4期）は計49名**（うち24名は研修修了）。

⇒ **当初の活動目標値（法人ベースで25機関、3期・30名の研修修了者）を超える成果。**

### 「統計エキスパート」育成状況（把握結果）【令和6年度（2024年度）を対象（概要）】

- |  |        |                            |
|--|--------|----------------------------|
| ① 大学統計教員育成研修の修了者・育成対象者から、学術論文や研究における統計学活用について実質的な指導を受け、 <b>修士論文合格・学会発表等の研究成果</b> をあげた者（大学院修士学生等） | ：計55名  | ▶ 「統計<br>エキスパート」<br>：計185名 |
| ② 当該教員の統計学に関連する <b>講義を複数科目、履修・修了</b> した者（同上）   | ：計130名 |                            |

# 【参考1】「統計エキスパート人材育成コンソーシアム」会員



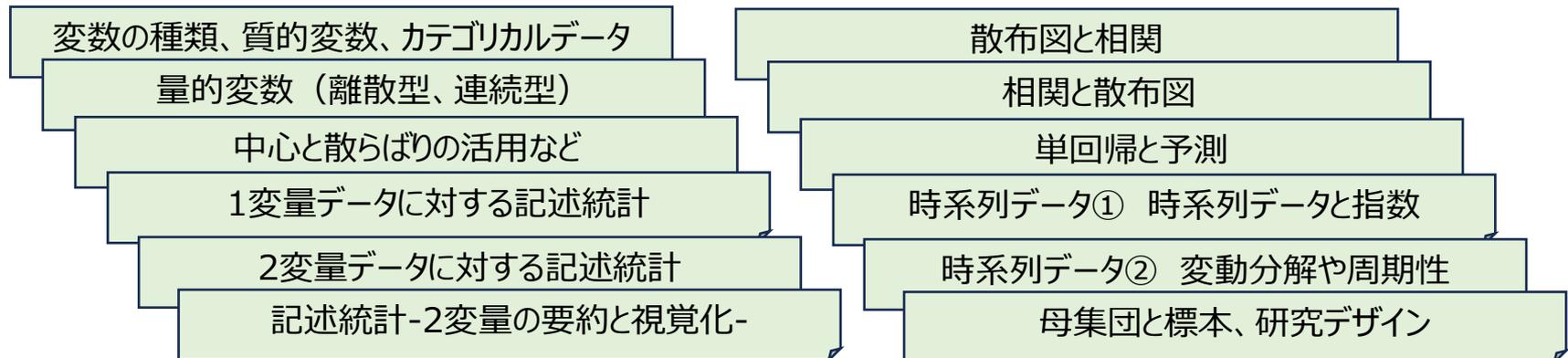
## (2) 教育システムの情報提供

### 【令和6年度（2024年度）事業実施計画の概要】

- ◆ 大学統計教員育成研修での標準教材の使用・評価結果や、先進海外情報の収集・研究等成果を参画機関と共有し、参画機関における統計エキスパート育成に向けた教材・カリキュラムの検討を支援。
- ◆ また、大学統計教員育成センター及びサテライト施設に整備したオンライン講義システムを活用し、教育環境の変化に対応した実践的な講義方法を検討し、その結果を参画機関と共有。

- 第2期・第3期大学統計教員育成研修において、**海外の著名大学における使用教材**から選定した研修教材やシニア教員推薦書籍（英文6種類・和文12種類）を引き続き使用・評価するとともに、これらの情報を**コンソーシアムホームページ**を通じて参画機関とも共有し、参画機関の統計エキスパート育成システムの構築・推進を支援。
- コンソーシアム・ホームページ「**会員サイト**」において、第1期修了生による教材開発演習の成果である「**統計学基礎教材集2024**」（令和6年（2024年）10月）、第2期研修生による「**統計学基礎 教材集2025**」（令和7年（2025年）1月）を共有し、参画機関からも高く評価。
- 質保証機関の統計検定制度の利用範囲を、**2級に加えて1級・準1級にも拡大**する措置を継続し、参画機関における統計エキスパート育成に係わる効果測定・力量把握等に活用。

### 【統計学基礎 教材集】の概要



など計53教材

## (3) 第2期・第3期研修の実施

### 【令和6年度（2024年度）事業実施計画の概要】

- ◆ 第2期大学統計教員育成研修の第3クール（令和6年（2024年）4月～9月）及び第4クール（令和6年（2024年）10月～令和7年（2025年）3月）においては、育成対象者自身の研究や所属参画機関における統計エキスパート育成に活用できるよう、第1クール及び第2クールで培った力をさらに伸ばし、共同研究演習、教材開発演習及びコンサルテーション演習を含めた研修を実施するとともに、所属参画機関においても、育成対象者のファカルティ・ディベロップメント活動を展開。
- ◆ また、第3期大学統計教員育成研修の第1クール（令和6年（2024年）4月～9月）及び第2クール（令和6年（2024年）10月～令和7年（2025年）3月）においては、統計ベースライン特習、統計教育力育成演習及び統計研究力強化演習から構成される「基礎科目」を中心に研修し、先端的データサイエンス特論や先端的データ分析演習等で不足している知識を補うとともに、所属参画機関においても、委託費の活用などにより育成対象者が研修に専念できる環境の整備を推進。

### 【第2期研修】（主なスケジュールは参考2参照）

- 研修生12名（参考3参照）は修了認定要件（参考4参照）をクリアし、**2年間の研修を修了**（令和7年（2025年）3月末）。
- **助教から講師・准教授にキャリアアップ**した研修生は計4名（予定を含む。）。研修開始後の転籍は計2名。**共同研究演習12件、教材開発演習4件、コンサルテーション演習1件**の成果（令和7年（2025年）3月末）。
- 4回の公開模擬講義の講義動画及び資料をコンソーシアム会員サイトに掲載。
- 第2期研修生による教材開発演習の成果を取りまとめた「**統計学基礎 教材集2025**」をコンソーシアム・ホームページの「会員サイト」に掲載し、参画機関に共有（令和7年（2025年）1月21日）。

### 【第3期研修】（主なスケジュールは参考2参照）

- 研修生13名（参考5参照。令和6年（2024年）10月末に14名中1名の研修生が自己都合により研修を辞退）が第1クール・第2クールの研修を修了。具体的には、全体研修（模擬講義）と担当メンターの下でグループ研修で知識を習得するとともに、先端的データサイエンス特論や先端的データ分析演習等の個別科目に参加。
- 研修の円滑な実施には、所属参画機関との協力が欠かせないことから、「**達成度管理WG**」の開催を通じて連携を強化するとともに、2回の**公開模擬講義の動画・資料**をコンソーシアム会員サイトに掲載。

## 【参考2】 第2期・第3期研修の主なスケジュール

令和6年（2024年）2月	第3期 事前説明会（22日 統計数理研究所）
4月	第2期・第3クール、第3期・第1クール開始
4月	第3期 開講式（2日 統計数理研究所）
4月	第3期 全体研修（模擬講義）
4月～7月	先端的データ分析演習（統計時系列分析:R,TESSと状態推定）
4月～5月	先端的データサイエンス特論（医療統計II）
5月～6月	第2期 全体研修（模擬講義）
6月	中間報告会（14日 北海道大学）
6月～7月	先端的データ分析演習（Python）
6月～7月	第3期 全体研修（模擬講義）
8月	第2期 全体研修（公開模擬講義）
9月	統計関連学会 発表（5日 東京理科大学）
9月	第3期 全体研修（公開模擬講義）
10月	第2期・第4クール、第3期・第2クール開始
9月～11月	先端的データ分析演習（R環境）
9月～12月	先端的データサイエンス特論（統計的因果推論）
11月	中間報告会（27日 滋賀大学）
12月	第3期 全体研修（模擬講義）
12月～1月	先端的データサイエンス特論（統計学における数理的基礎とその応用）
1月～2月	先端的データサイエンス特論（観察研究の統計的方法）
1月～2月	第2期 全体研修（公開模擬講義）
2月	中間報告会（27日 上智大学）
3月	修了式（17日 統計数理研究所）
3月	第3期 全体研修（公開模擬講義）

### 【参考3】 第2期修了生とメンター

令和7年（2025年）3月31日現在

修了者名	所属参画機関	学 位	メンター	副メンター
吉田 一生	北海道大学	博士（保健科学）	三輪 哲久	水田 正弘
深作 亮也	九州大学	博士（理学）	三輪 哲久	水田 正弘
張 天逸	早稲田大学	博士（理学）	水田 正弘	三輪 哲久
江 啓発	名古屋市立大学※	博士（医学）	折笠 秀樹	岩崎 学
多森 翔馬	東京理科大学	博士（薬学）	折笠 秀樹	岩崎 学
清家 大嗣	東京大学	博士（学際情報学）	清水 邦夫	水田 正弘
大野 航太	中央大学	博士（数理科学）	清水 邦夫	水田 正弘
西 颯人	東京大学	博士（工学）	国友 直人	岩崎 学
中西 正	北海道大学	博士（経済学）	国友 直人	岩崎 学
小野島 隆之	滋賀大学※	博士（情報学）	神保 雅一	中西 寛子
岡本 雅子	京都大学※	博士（情報学）	中西 寛子	神保 雅一
眞田 英毅	同志社大学※	博士（文学）	中西 寛子	神保 雅一

「※」印を付した参画機関の育成対象者は、滋賀大学サテライトの研修が中心

## 【参考4】 大学統計教員育成研修 修了認定の要件

科目名（全員履修）	内部評価	評価者	重み	内容
統計ベースライン特習 I～IV	認	メンター	必修	模擬講義 + グループ研修
統計教育力育成演習 I～IV	A, B, C	メンター全員	必修	公開模擬講義 + 提出物
統計研究力強化演習 I～IV	認	参画機関	必修	FD活動
統計検定 2 級	認	外部評価	必修	受験合格

科目名	内部評価	評価者	重み	内容
共同研究演習	認	担当教員	50	研究 + 学会発表（口頭，投稿）
教材開発演習	認	担当教員	50	教材など
コンサルテーション演習 <sup>2)</sup>	認	担当教員	50	報告書など
先端的データサイエンス特論（トピックス名）	認	担当教員	研修部で決定 20～35	講義参加 + レポート
先端的データ分析演習（トピックス名）	認	担当教員	研修部で決定 20～35	講義参加 + レポート
統計検定準 1 級	認	外部評価	30	受験合格
統計検定 1 級	認	外部評価	研修部で決定 ～50	受験（受験後の評価を提出）
			合計100以上	

## 【参考5】 第3期研修 育成対象者13名のメンター配置

所属参画大学	学位	メンター	副メンター
順天堂大学	博士（医学）	岩崎 学	折笠 秀樹
慶応大学	博士（医療マネジメント学）	折笠 秀樹	岩崎 学
DS施設	博士（理学）	国友 直人	岩崎 学
早稲田大学	博士（理学）	国友 直人	岩崎 学
上智大学	博士（工学）	清水 邦夫	水田 正弘
東京理科大学	博士（薬学）	清水 邦夫	水田 正弘
滋賀大学※	博士（情報学）	神保 雅一	中西 寛子
滋賀大学※	博士（理学）	神保 雅一	中西 寛子
岡山大学※	博士（学術）	中西 寛子	神保 雅一
広島大学※	博士（教育学）	三輪 哲久	水田 正弘
茨城大学	博士（農学）	三輪 哲久	水田 正弘
群馬大学	博士（理学）	水田 正弘	三輪 哲久
立正大学	博士（理学）	水田 正弘	三輪 哲久

「※」印を付した参画機関の育成対象者は、滋賀大学サテライトの研修が中心

## (4) 第4期研修の企画・準備

### 【令和6年度（2024年度）事業実施計画の概要】

- ◆ 令和7年（2025年）4月からの第4期大学統計教員育成研修について、参画機関への育成対象者の推薦・応募の依頼、コンソーシアム選考委員会における選考などの検討や準備を行う。

- 参画機関に対して、統計学以外の幅広い専攻分野も含めて育成対象者の推薦を依頼した上で、コンソーシアム選考委員会（令和6年（2024年）10月1日、10月28日、11月15日）において客観的に選考を行った上で、**11名の育成対象者を決定**（第1期からの通算育成対象者数は計49名）。
- 第4期研修の開始に先立ち、第2期研修から導入して効果が認められた「**事前説明会**」（育成対象者及び所属参画機関の研修担当教員を対象）を開催し（令和7年（2025年）2月26日）、研修スケジュールや留意点等について共通認識を確保。
- 第4期研修の開始に向け、第3期研修との同時並行的な実施を勘案し、**メンター教員を増員して9名体制**（参考6参照）を確保するとともに、これまでの研修の実施状況や自己点検の結果等を勘案して、研修カリキュラムの改善余地を検討。

### 第4期育成対象者の推薦参画機関・学位

推薦参画大学	学位	推薦参画大学	学位
立正大学	博士（総合学術）	中央大学	博士（理学）
東京学芸大学	博士（学術）	滋賀大学※	博士（学術）
東京理科大学	博士（工学）	名古屋大学※	博士（医学）
DS施設	博士（経済学）	九州大学	博士（数理学）
東京理科大学	博士（経済学）	群馬大学	博士（理学）
極地研究所	博士（理学）		

## 【参考6】 第4期大学統計教員育成研修のメンター体制

氏名	最終学歴・学位	主な職歴・社会貢献
【新規】 佐藤 俊哉	東京大学大学院医学系研究科保健学専攻博士課程修了。保健学博士。	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻医療統計学教授。日本計量生物学会会長・理事、日本薬剤疫学会評議員。国際計量生物学会Council member。

氏名	最終学歴・学位	主な職歴・社会貢献
岩崎 学	東京理科大学大学院理学研究科修士課程修了。理学博士。	横浜市立大学データサイエンス学部教授・学部長。統計関連学会連合会理事長、日本統計学会会長・理事長、応用統計学会会長。
折笠 秀樹	米国ノースカロライナ大学生物統計学科博士課程修了。学術博士Ph.D.	富山大学医学部教授。日本臨床薬理学会評議員、日本計量生物学会評議員。
国友 直人	Department of Statistics and Department of Economics, Graduate School, Stanford University (Ph.D. in Economics, Advisor: T.W. Anderson)	東京大学経済学部教授・学部長、明治大学政治経済学部教授。日本統計学会会長、内閣府社会経済研究所研究員。
清水 邦夫	東京理科大学大学院理学研究科数学専攻博士課程中途退学。理学博士	東京理科大学理学部教授、慶應義塾大学理工学部教授。応用統計学会会長。
神保 雅一	東京工業大学理工学研究科情報科学専攻修士課程修了。理学博士。	慶應義塾大学理工学部・理工学研究科教授、名古屋大学大学院情報科学研究科教授。日本統計学会代議員、応用統計学会監事。
中西 寛子	北海道大学大学院工学研究科情報工学専攻博士後期課程修了。工学博士。	成蹊大学経済学部教授、成蹊学園常務理事。日本統計学会理事・監事、応用統計学会副会長、品質管理学会代議員。
水田 正弘	北海道大学大学院工学研究科情報工学専攻博士後期課程修了。工学博士	北海道大学情報基盤センター教授。日本計算機統計学会会長、応用統計学会副会長。
三輪 哲久	東京大学大学院工学系研究科計数工学専攻修士課程修了。工学博士。	独立行政法人農業環境技術研究所生態系計測研究領域長。応用統計学会副会長、日本計量生物学会理事。

## 2-3. 選定結果通知における指摘事項への対応①

- 参画機関の積極的な協力のもと、コンソーシアム全体として密接な連携体制を構築し、事業を推進すること。

- コンソーシアムの事業及び運営に関する基本的事項は、全機関が参加する「総会」において審議・決定  
事業の実施に関する重要事項を審議する「運営委員会」は、令和5年度（2023年度）に、**参画機関委員を8名に増員し、幅広い立場からの意見をコンソーシアム運営に反映できるよう改組**
- 運営委員会の審議結果や資料を、コンソーシアム・ホームページや会員サイトを通じて全機関に周知するなど、密接な連携体制を構築
- **コンソーシアム・ホームページや会員サイトを順次充実**し、一層の連携強化を図るとともに、会員機関と連携してコンソーシアム・ワークショップを開催するなどして、本事業を推進

- 育成対象者を指導するメンターの質を適切に管理するとともに、参画機関の研修担当教員との役割分担を明確にして、事業を推進すること。

- 育成対象者の専攻分野に留意して、研修の進展に伴い、**メンターの3名拡充**を図るとともに、全メンターが参加する「研修部会議」の開催などを通じて研修の質を管理
- 各期の研修開講前に開催する「事前説明会」や、研修開始後に育成対象者ごとに定期的に行う「達成度管理WG」を通じた**連携**の下、**メンター**は主に講義関連（シラバス作成、講義手法、教材作成など）の指導、共同研究の支援などを行い、**参画機関の研修担当教員**は主に育成対象者の分野研究、参画機関での講義や他の教員等への貢献に関する管理を行うなど、**役割分担を明確化・共有**して、研修を実施
- 育成対象者のファカルティ・ディベロップメント活動などの実施を**参画機関に働き掛け**

## 2-3. 選定結果通知における指摘事項への対応②

- 育成対象者にとって、自身の研究業績の創出につながる取組を研修プログラムに組み込むなど、今後のキャリア形成につながっていく配慮すること。
- 研修初期に育成対象者自身の研究内容について発表する機会を設け、**メンター全員がその研究内容を理解した上で、大学統計教員育成研修を実施**
  - 本研修によってどのような発展を目指すかについて、「**研修部会議**」において全メンターの助言も得て、担当メンターを中心に検討
  - 繰り返し模擬講義を基本として習得する基礎科目に、個別科目（コンサルテーション演習、教材開発演習、共同研究演習、先端的データサイエンス特論、先端的データ分析演習）を有機的に組み込み、研究業績につながるよう配慮
  - その結果、育成対象者の専門研究分野（遺伝子発現の解析）における研究（遺伝子発現の変化を捉えるための公共データベースとの比較）において、統計的手法（ブートストラップ法）を応用してサンプルのばらつきを評価するなどの**新たな研究成果を創出**。また、メンター教員1名と育成対象者3名の共同翻訳による、統計学の入門書としても活用可能な「**ヘルスデータサイエンス-健康科学のための統計解析-**」を刊行するなどの成果。
- 国際的に活躍できる人材を育成するために必要な機会創出等に関する方策を積極的に検討すること。
- 大学統計教員育成研修では、海外でも評価されている**英文テキストを使用**しており、この英文テキストを従来の3種類から6種類に拡充するなどして、最新の統計手法を今後の研究に活かすことができるよう配慮。
  - 育成対象者は、研修により習得した統計的な知見を活かし、令和6年度（2024年度）に国内外で開催された国際会議等において、計33編の英語による口頭発表やポスター発表を行っているほか、Spatial Statisticsなどの国内外の英語論文誌に計45編の研究論文を発表。
  - 従来から取り組んでいる「全体研修で使用する資料への基本的な用語の英語訳の付加」、「英語による資料作成の容認」及び「英語による統計学の講義・講演の聴講」などの取組については、育成対象者からも評価されていることから、これらの取組を研修部会議において改めて確認、徹底。

## 2-3. 選定結果通知における指摘事項への対応③

- 育成研修カリキュラムにおいて、世界水準に見合う教科教育科目を設定するとともに、事業期間中に適切な見直しを行うこと。

- 第2期・第3期大学統計教員育成研修のカリキュラムは、第1期研修を基本としつつ、アメリカ、イギリスなどの教育方法に関する分析結果や自己点検の結果も踏まえ、**更なる充実を検討**
- 研修のテキストは、従来の**6種類から18種類に拡充**し、育成対象者の専攻分野や研修の進捗度合いに応じて効果的に使用

- 統計エキスパート人材の育成が計画通りに進まなかった場合の対応策等のリスク管理を検討すること。

- リスク管理の一環として、育成対象者が研修開始前・研修受講中に所属参画機関から**他機関に転籍する際の対処方針を策定**し、できる限り研修が継続できるよう配慮。研修期間中に転籍した3名については、転籍先の参画機関からの参加と位置付けて研修を修了・継続
- 質保証された30名以上の大学統計教員の育成に向け、参画機関別の育成研修への応募・参加状況を適切に管理し、**個別の事情を考慮して支援・勸奨等**を行った結果、4期で計49名の育成対象者を決定。このうち、第1期育成対象者12名・第2期育成対象者12名の計24名は、研修を修了

## 2-3. 選定結果通知における指摘事項への対応④

- 我が国の統計分野を支える人材の層を厚くするため、統計学以外の分野からの育成対象者も積極的に選抜し、統計エキスパート人材としての育成を推進すること。

- **第1期**大学統計教員育成研修の**12名の育成対象者**は、工学、情報学、文化情報学、保健学、経済学、薬学、理学など多岐にわたる専攻分野から選考
- **第2期**大学統計教員育成研修の**13名の育成対象者**も、情報学、学際情報学、医学、保健科学、薬学、経済学、工学、理学、文学など多岐にわたる専攻分野から選考
- **第3期**大学統計教員育成研修の**13名の育成対象者**も、医学、医療マネジメント学、理学、情報学、薬学、教育学、農学、学術など多岐にわたる専攻分野から選考
- **第4期**大学統計教員育成研修の**11名の育成対象者**も、医学、学術、工学、経済学、理学、数理学など多岐にわたる専攻分野から選考

- 事業終了後も我が国の統計分野が発展していくために、博士レベルの統計エキスパート人材を育成する方策を積極的に検討すること。

- 「自己点検」やプロジェクトの「中間評価」の結果を踏まえ、引き続きニーズの高い本プロジェクトの発展的な継続に向けたあり方に関して、参画機関とも連携して検討を進めていきたい

# 3. 参画機関における活動内容

## (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進）①

### 茨城大学

統計エキスパート育成システムの推進に向け、大学院農学研究科では統計教育のプログラム化を目指し、新規科目の開講と演習環境の整備を進めている。特に、学部の「農学部データサイエンス教育プログラム」との接続と発展性を重視し、大学院ではデータサイエンスの中核を担う統計学について、応用から専門基礎までを網羅するカリキュラムを設計した。指定科目の履修を通じて修了認定を受けられる制度は、令和8年度（2026年度）以降の制度化に向けて学内審議を進めている。

これまでの主な成果としては、大学院共通の統計教育強化を目的に、大学院統計関連科目の「統計学」に加え、新たに「統計数理学特論」および「統計解析学特論」の2科目を開講（いずれも統計検定準1級・1級レベルの内容を含む）し、令和4年度（2022年度）以降、修士課程における延べ履修者数は83名に達した。そのうち13名が新規開講科目を履修し、より発展的な統計学に関する知識を習得した。

また教員体制の強化として、第3期大学統計教員育成研修に教員1名を派遣し、さらに令和7年度（2025年度）着任の助教1名を新規採用した。

今後の展望としては、大学院教育における統計学の修了認定制度を起点とし、農学分野における高度統計人材の体系的な育成モデルの確立を目指す。加えて、データサイエンス教育プログラムからの継続的な接続や、専門科目群との連携による実践的な統計応用力の育成プログラムの導入を視野に入れる。

### 大阪大学

- 数学的な導出(数学的な記述をしたものを理解する)とプログラミング(ソースコードを読む)の両面から検討し、データ解析手法や機械学習アルゴリズムの本質を理解するような学習をさせた。統計学やソフトウェアをブラックボックスと見るようなことは避けるような習慣ができてきた。
- 学生が自分の論文を実データに適用してうまく動作しないときに、どうしてそのような挙動を見せるのか、(感覚的な理解で終わらずに)粘り強く考える習慣ができてきた。
- 数学的なロジックを脳裏に構築できた結果として、実際の場面で、統計学を使わない状況でもデータの背後にある本質を見ることができるようになってきた。

## (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進）②

### 岡山大学

AI・数理データサイエンスセンター教育推進部門が所掌する業務内容の一つとして、統計エキスパート育成システムの推進に取り組んでいる。その一環として、同センター教育推進部門兼任教員の一人である、助教（法務学域）が第3期研修に参加している。

同センター教育推進部門の主催により令和7年（2025年）3月に「2024年度岡山大学AI・数理データサイエンス教育シンポジウム」を開催した。高度情報専門人材育成に関する県内大学の取り組みの紹介や、生成AIの教育への活用に関する話題提供があった。多数の教員・学生が参加し、統計エキスパート人材育成に向けた土台となったものと期待される。

大学院環境生命自然科学研究科（令和5年4月改組設置）では、博士前期課程数理情報科学学位プログラム・数理データ科学コースのうち統計データ科学に関する教育研究分野において、年間数名ずつの統計エキスパート人材を育成できる体制となっている。育成対象者の助教も同コースの演習科目にて大学院生の指導助言に携わっている。

文部科学省の公募事業（Xプログラム）に本学が採択されたことを受け、令和7年（2025年）4月に大学院教育学研究科を改組して「教育データサイエンス学位プログラム」の設置が認可され、準備を行った。文系学問分野とデータサイエンスを融合させるカリキュラムにより、ダブルメジャーのエキスパート人材育成を推進する。

### 九州大学

九州大学マス・フォア・インダストリ研究所では、令和4年（2022年）4月に産業数理統計研究部門が新設された。この部門は、統計学の基礎理論を深めることにより、社会や産業、さまざまな科学分野における問題解決への貢献を目指している。本部門には、令和5年（2023年）に外国人教授1名、准教授1名が着任した。また、令和6年度（2024年度）には新たに准教授1名、助教1名着任が加わった。これにより、部門の専門スタッフは合計8名となり、数理統計学、統計モデリング、位相的データ解析といった多岐にわたる分野のトップレベルの専門知識が集結している。また、数理学研究院も合わせると、九大数理の統計の研究者は11名になった。

令和5年（2023年）、および令和6年（2024年）12月には、産業数理統計チュートリアルが開催され、多くの参加者に対して高度な統計理論の普及が推進された（イベントページ：<https://www.stats.imi.kyushu-u.ac.jp/event-tutorial2024/>）。

## (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進）③

### 京都女子大学

第1期大学統計教員育成研修修了者の研究および教育の質を向上させることを目的として、令和7年（2025年）2月14日に京都女子大学データサイエンス学部・研究所シンポジウムを開催した。本シンポジウムでは、データサイエンス系の学部・学科を有する、または開設を予定している大学として、順天堂大学、横浜市立大学、大妻女子大学、実践女子大学から講演者を招き、データサイエンス教育の現状と今後の展望について講演が行われた。さらに、パネルディスカッションでは、データサイエンス教育にとどまらず、企業や自治体との連携についても活発な意見交換がなされた。

研修生にとっては、他大学におけるデータサイエンス教育の実情に触れるとともに、企業との連携を通じて、幅広い分野の課題に対応する実践的なデータサイエンス教育として、多様性に富んだ統計教育を受ける貴重な機会となった。

また、研修生の教育力を高めるための取り組みとして、「データサイエンス（DS）カフェ」の運営も行われた。DSカフェは、学生が教員に自由に質問できる場として、オフィスアワーとは別に設けられたものである。このカフェでは、学生から寄せられる多様な質問に対して研修生が柔軟に対応することで、応答の幅が広がり、教育スキルの向上が図られた。さらにDSカフェの新たな試みとして、研修生が主体となってデータサイエンティストを招き、講演会を開催する取り組みも行われた。

研究面では、統計教員育成研修修了者および育成対象である大学院生（統計エキスパート）は、幅広い分野において研究を推進し、国内外の学会での口頭発表に加え、国内および国際誌への論文投稿を通じて、研究成果の発信を行っている。

### 京都大学

令和5年度（2023年度）に統計エキスパート教育用のLMSの導入を目的として委託費で購入したサーバーを京都大学における認証システムと連携させた上でMoodleを稼働させ、学内のデータサイエンス関連の講義・演習の教材の実施環境、オンライン試験実施環境の整備を行ったほか、JupyterHubを用いたプログラミング習得度の管理を行うシステムの導入も行った。さらに、大学院生を対象として深層学習モデルを用いた演習や研究指導を行うために、GPU搭載のワークステーションの整備も行った。

さらに、委託費で購入した録画機材を使用して、統計検定データサイエンス発展級対策を目的とした動画教材（60本、9時間分）を作成し、現在公開準備中である。

# (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進）④

## 群馬大学

高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)に採択された22校の高校に対する数理・統計教育教材を作成し、高校教員の数理・統計人材育成を行った。令和6年度末には、DX・データサイエンス教育に関する地域循環型人材育成を目指した交流会を開催(参加139名)し、高校教員など教育関係者に対する、数理・統計教育を行なった。リスキリング教育として社会人を対象としたデータサイエンスに関する講座を実施した。また、データサイエンス教育を近隣大学に提供するための教材およびシステム環境を作成した。

## 慶應義塾大学

公衆衛生・スポーツ健康科学専攻の公衆衛生学プログラムに令和7年度から新たに、ヘルスケアデータサイエンス、コミュニティ&ポピュレーションヘルス、ヘルス&ソーシャルケアの3つのユニットを設けた。令和6年度(2024年度)はその設置に向けた準備を進めた。

前年度に引き続き、グループワークを主体とした統計関連科目であるクオリティマネジメント、サービスデータサイエンス、多変量因果解析の3科目の教材を更新した。

マイクロデータを分析する研究に取り組む教員や大学院生のために、統計マイクロデータのオンサイト施設を運営している。今年度は、のべ76日の利用があった。この施設の予約に関する利便性を向上すべく、オンライン化及び受付業務の省力化を進めている。

## 国立極地研究所

後期に極域データ解析学の講義を計15回実施した。令和5年度(2023年)に導入したサーバー上に構築したJupyterhub/Python環境を用いて、演習を毎回30分程度行った。講義では、記述統計、確率分布、推定、仮設検定、回帰、モデル選択、分類、実験デザイン、時系列解析など、統計学の基礎的な項目を取り上げた。講義で用いるデータセットは主にR言語向けに配布されている様々なデータセット群のなかから、特にPalmer基地でのペンギン調査に関するものをよく用いた。最終回にはレポートを課し、講義で用いた上記データセット群の中から各自対象とするものを選び、講義で学んだ統計学の手法を適用して何らかの知見を得る、という内容とした。講義は総合研究大学院大学 極域科学コースの学生2人が履修・修了した他、南極観測隊員候補者の中から2名が聴講した。

また、統計学の発展的な内容を十分に扱うには時間が足りないことから、来年度新たに「先端極域計測学」の講義を開講することとし、その設計を行った。本講義では、計測およびデータ解析の実用的な手法や、統計学の発展的事項を取り上げるもので、講義の形式は極域データ解析学と同じとした。深層学習やベイズ統計、スパースモデリング、時間周波数解析、ノンパラメトリック法、SVM、クラスタリング、などを扱う予定である。

# (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進）⑤

## 滋賀大学

本大学においては、データサイエンス研究科博士前期課程（定員80人）が業務受託前より存在し、統計学を主要な柱の一つとして、データサイエンス教育が行われてきた。まず、入学時の段階で、統計検定2級レベルの統計学の知識を有していることが求められている。入学後のカリキュラムでも、モデル構築・評価の科目を多く揃え、これらの中で統計学を反復的に学習させている。また、企業との共同研究に参加することで、データサイエンスの応用力・実践力の強化に努めている。

令和6年度の実績は以下の通りである。

- 令和6年（2024年）4月：地方銀行とのデータ活用による産業振興の研究（指導教員2名、大学院生2名）
- 令和6年（2024年）4月：関西大手化学系企業とのデータサイエンス課題解決（指導教員11名、大学院生1名）
- 令和6年（2024年）4月：関東情報系企業とのデータ解析（指導教員2名、大学院生13名）
- 令和6年（2024年）4月：関西大手インフラ会社と電力需要予測の研究（指導教員4名、大学院生2名）
- 令和6年（2024年）4月：関西大手製造会社と空調温度変更モデルの研究（指導教員3名、大学院生1名）
- 令和6年（2024年）4月：医療法人と機械学習に基づく予測モデルの研究（指導教員2名、大学院生1名）
- 令和6年（2024年）4月：宗教法人と教勢調査に関する研究（指導教員2名、大学院生1名）
- 令和6年（2024年）5月：製造企業との機械学習による課題解決（指導教員3名、大学院生1名）
- 令和6年（2024年）8月：情報系企業との機械学習による課題解決（指導教員4名、大学院生1名）

## 順天堂大学

本学では、令和3年度（2021年度）から大学院医学研究科修士課程にデータサイエンスコースを開講し、令和5年（2023年）4月にはデータサイエンス学位プログラムへと再編した。さらに、令和6年度（2024年度）には同プログラムの博士課程を開設し、統計エキスパート育成環境の拡充を図っている。この取り組みでは、適切な設備とツールの整備を通じて統計エキスパートの育成を推進している。また、令和7年度からは大学院健康データサイエンス研究科を新設し、第2期研修生の講師は医学研究科との併任となる。医学研究科と同様に教育システムの構築を進め、修士課程レベルの統計エキスパート人材育成を推進していく。

令和6年度（2024年度）までに、統計エキスパート育成を主目的として整備を続けている「データサイエンス研究室」では、本年度購入したワークステーションを含め、実習用ワークステーション9台（ノートパソコン含む）の整備が完了した。データサイエンス担当教員は、大学院生に対して医用画像統計解析の実習教育を実施しており、学生一人ひとりにワークステーションを割り当てることで、実践的かつインタラクティブな指導を推進している。統計解析環境の構築は本年度購入機を含めすでに完了しており、第2期研修生および第3期研修生は、本プロジェクトの推進、統計エキスパート教育の展開、さらに自身の研究にもこれらの環境を活用している。

## (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進）⑥

### 上智大学

作成したオンデマンド教材や、統計ソフトウェア等を活用し、大学院生へ教育や研究活動を充実させた。また、看護学専攻の教員および大学院生向けのFDセミナーを開催し、統計手法やツールの説明に加え、機械学習や人口知能の活用方法等について教授した。参加者の多くに興味を持っていただくことができ、研究連携だけでなく、互いの科目を供出・相互履修のきっかけをつくることができた。

### 総合研究大学院大学

大学院での統計科学の基礎科目として8つの科目を提供している。また、専門科目として40程度の科目を提供し、統計科学関連の学位取得者を5名輩出した。  
基礎科目の一つで、研修修了生に講義の場を提供している。

### 中央大学

統計学を駆使し学術研究や産業界等に貢献することができる統計エキスパートとして大学院生等を育成するシステム構築を目的として、事業担当教員を中心に以下の活動を行なった。

データ駆動型社会における統計学のエキスパート人材の育成には、統計的概念や統計手法への理解のみならず、実データに基づいた統計的思考力 (statistical thinking) の醸成が不可欠である。本取り組みでは、前年度までに環境を整えた実データ収集と活用、分析の基盤を維持し、ビッグデータ分析ツール利活用をすすめた。

それら分析、実験環境を十分に活用することで、統計的思考力を養うための演習、ゼミ活動を積極的にすすめることができた。

# (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進）⑦

## DS共同利用基盤施設

本施設からの研修育成対象者はメンターからのアドバイスを受けながら、後期に非常勤講師として担当した「多変量解析」（理系大学学部2年生対象）の講義に使用する教材とシラバスの作成をより効果的に進めることができた。

また、施設の活動としては（1）社会データ構造化センターが公的統計マイクロデータ研究コンソーシアムと共催した令和6年（2024年）のシンポジウムにおけるチュートリアル部分（内容は匿名データの利用手続きについて、教育用標準データの解析事例）の講演をオンライン視聴が可能となるようにビデオ化を進めた（ウェブサイト上での公開は令和7年（2025年）4月）。（2）令和5年度（2023年度）から整備を進めている教材利用を想定した社会調査データの施設内部における試行利用を進めることで、教材としての展開可能性をより具体的に検討した（判別分析の教材としての利用可能性等を検討することができた）。これらは（1）（2）の教材は、他機関からの研修参加者だけでなく、特に社会科学系の大学院においては育成対象と想定される統計エキスパート（修士クラスの学生）の参考となるものと想定される。委託費を利用したものではないが、（2）についてはより簡便な利用とデータ利用後の交流が可能となるような「社会データプラットフォーム」の開発を進めた。令和7年度（2025年度）には他機関の研修参加者、統計エキスパート等の利用を呼びかけることができる見込みである。

## 東京科学大学

本学修士課程におけるデータサイエンス関連科目のコンテンツを精査し、新規科目の開設を検討するとともに、文部科学省「データ関連人材育成プログラム」で開発したカリキュラムや教材を活用した修士課程向けコースの開設も併せて検討した。

## 東京学芸大学

- 統計エキスパート育成システムの構築のために設備備品（デスクトップPC ならびにノートPC）を購入し、分析及び業務に滞りが生じないように設備を整えた。
- 関連書籍を購入し、統計エキスパート育成のための新たな科目開発への検討を行った。
- 教員養成段階の学生に対し、個人の選択に応じた生成AI によるフィードバックシステムおよびフィードバックシステムを搭載した授業運用支援システムを開発し、学生たちの振り返りを促し、効果的な統計教育をサポートする体制を整えた。令和7年度（2025年度）の学部2年生必修授業「教育のためのデータサイエンス」でシステムを稼働する予定である。
- 実データに基づく重回帰分析・分散分析の教材開発を業者に発注し、分析体験を取り入れた統計教育が可能になった。なお、教材は、研修予定の教員が持つ統計の授業「数理・データサイエンスⅡ」において活用した。
- 推測統計の動画教材を開発し、学生の復習や自習に役立てられるようにした。今後、弊学の教育プラットフォーム「I Dig Edu」内で公開し、教育者の主体的な学びに活かす予定である。

## (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進）⑧

### 東京大学（数理・情報）

本学の特任助教2名が統計エキスパート人材育成プロジェクトの研修に参加し、第2期大学統計育成研修を修了した。さらに、数理・データサイエンス・AI教育強化事業と連携した統計教育の充実を進めた。

### 東京大学（経済）

令和3年度（2021年度）に整備した計量経済学の分析用ソフトウェアやワークステーションの活用を継続して行っており、院生の自主的な学習・研究を通じて、機関内の統計エキスパート育成の推進を図った。計量経済学の分析用ソフトウェアについては、統計コース以外の院生についても利用を促進しており、たとえばマーケティングなどの分野の院生も利用をしている。さらに令和5年度（2023年度）には、主として応用データ分析を行う「政策・ビジネスのためのデータ分析」といった講義でも利用をしており、引き続き令和6年度（2024年度）においても、継続・促進していく予定である。

このような取組の結果、所属院生は、日本統計学会の春季集会や統計関連学会連合大会等の国内外の学会にて継続的に発表を行っている。

また、統計検定2級、準1級、1級の受験支援をいただいたことにより、院生の他に学部生に対しても広く主体的に統計学の学びに取り組んでもらうことができた。

## (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進）⑨

### 東京理科大学

本学は7学部33学科、7研究科30専攻を有する理工系総合大学であり、多様なドメインを有するすべての学部・研究科でデータを扱っているという特徴がある。そして学部生全員を対象としたデータサイエンス教育プログラム[基礎]、および、大学院生対象のデータサイエンス教育プログラム[専門]（キャンパスの特色を生かした数理・ビジネス・人工知能・医薬・機械学習・医療統計・インフォマティクスの7つのコース）を展開し、データサイエンスに関する人材育成に力を入れている。また、令和4年度からリテラシーレベルの教育として全学部共通科目「データサイエンス・AI概論」を開講し、令和5年度（2023年度）に文部科学省から「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」の認定を受けた。さらに、令和6年度（2024年度）からは、学部から大学院までのデータサイエンスの一貫教育を推進するために、教育プログラムをLevel 1 からLevel 4 までの4つのレベルに再編成した。それに伴い、データサイエンス教育プログラム[基礎]はLevel 3に、データサイエンス教育プログラム[専門]はLevel 4に変更された。

第3期研修生として派遣された助教1名は、薬学部薬学科から選ばれた若手教員で、現在研修中である。後述するように、十分な成果をあげ、大学院学生の統計教育に大いに貢献している。

第1期研修生2名は令和5年（2023年）9月に、第2期研修生1名は令和7年（2025年）3月に無事に研修を修了し、現在、所属研究科で研究指導や統計教育に尽力している。そして大学院生を対象に統計の講習会を開催したり、学部学生用の教材を作成したりしている。

統計エキスパート育成システムに関しては、システムの構築に向けて事業担当教員、研修担当教員、研修生間でオンラインやメールを用いて打ち合わせを行った。

### 同志社大学

学術研究や産業界等に貢献することができる統計エキスパートの育成を目的として、所属大学院生を対象に、自らの研究内容を明確に説明し、他者に理解されやすく伝える能力を向上させるための訓練を実施した。この訓練では、大学院生それぞれが自身の研究テーマや目的、成果を具体的かつ論理的に整理し、分かり易い形で表現する技術を磨くことを重視した。特に、研究内容を専門外の人々にも伝える際のコミュニケーション能力の向上を目的とし、口頭発表や視覚的資料の作成、質問への的確な対応を行うスキルの習得を促した。

具体的なプログラムとしては、各自研究発表を行い、他の参加者からフィードバックを受ける形式を採用した。これにより、参加者は自身の説明のどの部分が分かり易く、また改善が必要かを具体的に把握することが可能となった。また、専門用語の使用を抑えた説明方法や、視覚的要素を効果的に活用する方法についてのゼミも実施した。これらの活動を通じて、大学院生は学術的な場だけでなく産業界などでも活用できる実践的なコミュニケーションスキルを獲得した。

## (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進） ⑩

### 長崎大学

- 大学院総合生産科学研究科の科目「マーケティングサイエンス特論」の授業の一環として、長崎市を中心に展開するスーパーマーケット「株式会社ジョイフルサンアルファ」から提供いただいたPOSデータを用いて「第1回データ分析ハッカソン成果発表会」を開催した。講義を履修する大学院生だけではなく、学内外から参加希望者を募り、情報データ科学部の学部学生に加えて、千葉工業大学、台湾の国立台北教育大学の学生など58名が参加した。成果発表会を令和7年（2025年）2月4日（火）に開催し、最優秀賞と優秀賞を選定した。この取り組みは長崎大学のHPにて紹介された。<https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/news/news4570.html>
- 情報データ科学部4年生1名が、本学部教員の推薦により、統計数理研究所医療健康データ科学研究センターの短期集中研修『医療健康データ科学のための機械学習コース』に参加し統計エキスパート研修を受けた。
- センターによる統計検定2級受験クーポンを、3年生の受験希望者6名に配布した。その結果、2級に4名が合格した。
- 長崎大学と長崎県教育委員会が連携して実施した事業「長崎大学との協働探究」において、「データサイエンスによるデータの探求」と題し、長崎県立北陽台高校の生徒の探求活動に対する指導および助言を行った。

### 名古屋市立大学

教育・研究を桜山キャンパスおよび葵キャンパスの2か所で行われており、両キャンパスのフリーアドレスオフィスにおいて、ノートパソコン、大型プリンター、統計解析ソフトの充足を行い、統計教育の際に資料を印刷することが可能であり、統計教育が実践できる環境が整備されていることにより、統計エキスパート（大学院修士課程レベル）の育成に大いに役立っている。

### 名古屋大学

機関内に統計エキスパートを育成するシステムの構築を継続的に進めた。統計解析ソフトを活用した統計解析演習をより効率的に実施できるよう、これまでに作成したe-learning教材の内容を充実させ、修士課程や博士課程の授業に継続的に組み入れた。その他、機関内の統計解析に係る既存の授業や演習の実施時期や内容を踏まえ、統計エキスパート養成のカリキュラムマネジメントを行った。また、統計セミナー等の特別講義を適宜開催した。

## (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進） ⑪

### 一橋大学

本学における活動は、「所属大学院生を、統計を駆使して学術研究や産業界等に貢献することができる統計エキスパートに育成する」ことである。令和6年度（2024年度）においては、第1期生21名および第2期生21名（うち休学者1名）の教育を行い、第1期生のうち15名が、本学における統計エキスパート育成システムを修了した。

また、統計エキスパート育成システムに参加する令和7年度（2025年度）入学者選抜も実施した。修士課程については、21名の定員に対し47名の出願があり、最終的に20名の学生が第3期生として入学した。また博士後期課程については、7名の定員に対して14名の出願があり、最終的に9名の学生が第1期生として進学・編入学した。合計29名の学生が、新たに本学の統計エキスパート育成システムに参加することとなった。

### 兵庫県立大学

令和6年（2024年）3月に、本プロジェクトの第1期育成課程の修了生が、本学を退職し、同年4月1日より、関西大学に新設のビジネスデータサイエンス学部(採用時は準備室)に准教授として採用された。令和6年度（2024年度）は、この後継者となる若手教員の採用活動に取り組んだが、統計エキスパート育成プロジェクトの研修スケジュールが合わず、第4期生の申請には至らなかった。

本学大学院情報科学研究科のカリキュラムは、現時点で統計学を体系的に教える内容にはなっていないが、「データ科学演習」など、統計学を研究に実応用するための演習科目において、引き続き教育に取り組んでいきたい。

# (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進） ⑫

## 広島大学

- 大学統計教員の育成に向けて一番効果的なのは学会発表や論文投稿等を通じて実力が身についたかどうかを評価することにあると考えている。そこで当参画機関では、第3期研修生に、統計関連学会連合大会、実験社会科学カンファレンス、大学入試学会、Higher Education Research Asia、The Japanese Society for Quantitative Political Science、Joint Quantitative Political Science Conference for Asia and Australasiaなどでの発表を行わせた。特に海外での会合参加には費用負担が大きいので、当参画機関の運営費拠出による支援を拡充した。同時に、当参画機関による研究会（RIHE公開研究会「社会科学における計量分析を再考する：重回帰分析やSEMはいったい何を“説明”してきたのだろうか？」）を主催し登壇発表する機会を設けるなどを行った。また学習の成果を学術誌『教育社会学研究』『大学論集』に寄稿するとともに、『行動計量学』等の専門誌への積極的な投稿を行い、採択された。
- 令和7年（2025年）4月から発足した広島大学大学院人間社会科学研究所教育データサイエンスプログラムの併任教員となり、二つの授業（「教育におけるデータサイエンス活用法」「教育学・心理学研究法」）を指導教員とともに受け持つこととなり、本プロジェクトを通じて学習した知見を元に、カリキュラムの構成や授業内容に関する企画立案やシラバス作成に寄与し、教育学・心理学系のデータサイエンス教育構築に貢献した。

## 北海道大学

令和6年度（2024年度）において、本プロジェクトの目的である統計エキスパート（大学院修士課程レベル）の育成に向け、以下のような具体的な取組を実施した。

統計に関する情報の共有を目的として、北海道大学の教育システム（ELMS）上に新たなグループを開設した。当該グループ内では、統計研修に参加した教員が研修過程において作成した統計に関するプレゼンテーション資料を、学習補助教材として大学院生向けに提供した。これにより、大学院生が実践的な統計知識に触れる機会を広げることができた。

また、同グループへのアクセスを円滑に行うため、教務担当部局と連携し、就学者IDを用いた学生登録の方法と周知体制についても検討を行った。

さらに、大学院生が自身の研究において統計的手法に関する課題に直面した際に支援を受けられるよう、「統計相談コーナー」を試験的に設置した。この相談窓口では、研修を受けた教員が相談対応を行い、必要に応じて統計ソフトウェアを用いた実践的な支援を提供した。運用開始に先立ち、少人数の学生を対象とした試行的な運用を実施し、今後の本格的な運用に向けた体制の整備と課題の洗い出しを行った。

## (1) 統計エキスパート育成システムの構築（推進） ⑬

### 立正大学

研修者の統計関連の担当授業計画に資する資料を購入し、また研修者の大学院生に対する教育機会を提供する環境を整備することを、当機関の統計エキスパート育成システム構築・推進の目標とする。

本学熊谷キャンパス所属の大学院生が統計学の知識を修得する仕組みとして、学部開設の統計学関連専門科目を令和7年度より科目等履修できるよう環境を整備した。なお、本来は大学院科目として環境を整備すべきところであるが、当機関における研究科の設置が遅れているためこうした対応となっている。今後、なるべく早い時期に当機関を基礎学部とする研究科を設置し、万全の体制を整えていく計画である。

### 早稲田大学

事業期間を通じて本学所属大学院生を、統計学・データサイエンスの基礎を理解した上でその知見を自身の専門分野における学術研究や産業界等に展開可能な統計エキスパートとして育成することを目標としている。本年度は、オンデマンドコンテンツチェックおよび修正を推進した。その内容および背景は次の通りである。

本学所属大学院生の専攻を問わず、データサイエンスの基礎を学んでもらうために、オンデマンドを中心にした講義を展開している。このオンデマンドコンテンツに関しては作成後も、改善修正を進めている。例えば統計学に一定の知識を持つ学生アルバイトであるLearning Assistant (LA)にコンテンツをチェックしてもらい改善点を報告いただいている。そこでの意見や受講生からのアンケート結果を踏まえてコンテンツを改善している。また令和6年度は英語科目を含むいくつかの科目を新設した。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備①

### 茨城大学

令和6年度（2024年度）は、第3期統計教員育成研修に参加する教員の研究・教育環境を整えるため、備品・消耗品等を購入した。その結果、既存の居室を活用しつつ、統計研修および統計教育の推進に必要な環境を迅速に整備することができた。また、非常勤講師を採用することで、研修教員の講義負担を軽減し、研修に専念できる体制を整えた。

これまでの成果として、研修教員は第1クールおよび第2クールの統計研修において、全体研修の受講、公開模擬講義の実施、ならびにシラバスや教材の作成を経験し、基礎的な統計学から発展的な内容まで担当できる実力を身につけた。

令和7年度は、この基礎知識をもとに第3クールおよび第4クールの研修に取り組み、専門分野と統計学を融合させた講義力の習得を目指す。これにより、農学分野における専門性の高い統計教育を実現することが期待される。

### 岡山大学

研究科として、研修対象者である助教の授業担当や学内委員等の担当を最小限にとどめるほか、研修対象者が担っていた情報・広報に関する業務につき、補助業務を行う非常勤職員を配置して、研修対象者の業務負担の軽減を行った。他に代替できない担当業務については、研修担当者の希望に応じた実施時期とするなど柔軟な対応を行った。

研修対象者である助教は5月16日に開催された滋賀大学サテライト合同研修会に出席し、講演拝聴とディスカッションを行った。6月14日には北海道大学で開催された中間報告会に参加し、北海道大学のデータサイエンスの教育現状及び今後の計画を学ぶことで、統計エキスパートとしての知見を広めた。9月2日～9月5日には東京理科大学で開催された統計関連学会連合大会に出席し、研究に関する情報収集を行った。また、企画セッション「統計エキスパート人材育成－多様な分野での統計活用と展開」で他の研修生たちの研究発表を聞いた後、メンターと今後の研究に関する研究打ち合わせを行った。そして2月27日には上智大学で開催された中間報告会に参加し、研究成果の報告を行った。

また、パソコンや統計関係書籍、研修環境整備に必要な消耗品等を購入し、研修に集中できる環境を整えた。

研修育成対象者の本学での移動時間や業務負担を軽減するため、遠隔会議システムを導入した。

AI・数理データサイエンスセンター教育推進部門における今後の業務遂行に活かす予定である。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備②

### 九州大学

研修育成対象者は、因子分析や実験計画法を含む統計学の基礎を学びながら、計算機代数を活用した専門的な統計解析を行う研修を進めている。令和6年度は、研修育成対象者の研修参加や研究活動に必要な旅費等に多くの経費が投じられ、特に移動先での研究活動を円滑に実施するため、高性能なノートパソコンやタブレット端末を導入した。

### 京都大学

令和6年度は育成対象者が京都大学で実施している統計学関連の講義から得られたデータの分析や、研修の一環として実施した統計検定受験者のデータ解析を通じて、学部初年次の統計教育法、データ分析演習教授法に関する下記の4件の学会報告に通じる研究成果を上げた。学会出張にかかる経費は委託費より支出した。また、これらの成果で用いたデータの一部は、委託費によって購入したサーバーを用いた演習によって入手したものである。また、分析の一部は、委託費によって購入したパソコンを用いて行ったものである。

### 群馬大学

研修生が、数理・統計教育教材の教育環境整備に専念できるよう、当該センター教員が本来担当すべき授業の主担当業務を免除し、通常業務の負担を軽減することで、研修に専念できる環境を整備した。

### 慶應義塾大学

達成度管理WGなどを通じて、メンター教員と連携し、研修生の研修受講を支援した。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備③

### 滋賀大学

第2期研修には、本学から1名の研修生（本学の助教）が参加しているが、第3・第4クールで、研修担当教官は以下のことを行った。

ア) 中核機関での達成度WGと模擬講義に参加して、中核機関での研修の進み具合をモニターした。

イ) 「統計研究力強化演習」の一環として、学部の講義、統計学要論（統計的推測の基礎）を研修生が担当したが、研修担当教官と他3名の教員が授業参観して、アドバイスをを行った。

研修生が、中核機関での研修に注力できるよう、本学での業務を軽減した。研修生の本来業務として、外部との共同研究、コンサルティング業務が存在したが、これらをカバーするために、前年度から継続して任期付き助教を1名雇用し、研修生の本来業務の一部を担ってもらうとともに、学部・研究科の現員の教員も上記本来業務の一部を代行した。

第3期研修には、本学から2名の研修生（本学の助教）が参加しているが、第1・第2クールで、研修担当教官は以下のことを行った。

ア) 中核機関での達成度WGと模擬講義に参加して、中核機関での研修の進み具合をモニターした。

イ) 「統計研究力強化演習」の一環として、学部の講義、データサイエンス応用演習（Rを使ったデータ分析の演習）、を2名の研修生が別々に担当したが、研修担当教官と他1名の教員がそれぞれ授業参観して、アドバイスをを行った。

研修生が、中核機関での研修に注力できるよう、本学での業務を軽減した。研修生の本来業務として、外部との共同研究、コンサルティング業務が存在したが、これらをカバーするために、前年度から継続して任期付き助教を1名雇用し、研修生の本来業務の一部を担ってもらうとともに、学部・研究科の現員の教員も上記本来業務の一部を代行した。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備④

### 順天堂大学

第2期育成対象者の膨大な画像データや開発環境を一元管理する目的で、設備費を活用しNAS（ネットワークHDD）を購入した。これによりクローズドネットワークを介して迅速かつ安定したアクセスが可能となり、研究活動の効率化を実現した。また、育成対象者が、本来の職務を遂行しながらプロジェクトに取り組める環境を整えるため、研究補助員を雇用し研究及び事務作業双方で負担軽減を図った。

第3期育成対象者の研究活動を円滑に進め、研修に専念できる環境を整備する目的でワークステーションを導入した。これにより、当人の研究テーマであるMRIデータを用いた画像統計解析研究が通常のPCと比較してより高速に行うことが可能となり、研究活動の効率化を実現した。現在、第3期育成対象者の専門であるMRI画像定量値を特徴量として活用し、様々な統計手法を用いた疾患病態評価研究や統計学的手法に基づくバイオマーカー開発研究が進行中である。これらの研究には重回帰分析による予測モデルの確立や多変量データ分析が含まれている。また、大学統計教員としての実践にあたる講義において質の向上を図るべくペンタブレットを導入した。これにより授業内でリアルタイムにスライドへの追加情報や図を描画することができ、統計教育上の学生の理解をさらに促進することを狙いとした。

### 上智大学

委託費を活用し、研修参加者が研究につかうサーバーを7台購入することで本人の研究を後押しするとともに、当該教員が関わる研究を大学院生とともに遂行し、多くの学会発表や学会誌への投稿につなげることができた。

研修参加者の担当講義の一部を非常勤講師で賄うことで、研修参加に伴う負担の一部を相殺することができ、研修に参加できる環境を確保した。

研修参加にかかる費用を賄うことで、日本統計関連学会連合大会・中間報告会や、国際学会などに参加し、研修参加者の研究能力向上と研究成果の発信を行った。

### 中央大学

令和6年度（2024年度）は第2期育成研修に参加した研修育成者の2年目の支援を目的として、事業担当教員、研修育成対象者と意見交換をしながら、以下の活動を行った。

研修育成対象者の活動のための費用として、国内外での学会発表、参加を行ったほか、書籍の購入や情報関連機器の購入をすすめた。令和6年度は個人の研究室環境の整備もすすめ、より計算能力の高いコンピュータの導入やWeb会議システムの利用により、打ち合わせやコンテンツ作成などの通常業務負担を軽減するための措置もとった。

こうした活動から、研修育成対象者は予定した研修を無事修了することができた。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備⑤

### データサイエンス共同利用基盤施設

委託費を利用した研修環境の整備として次の二点を進めた。第一に、研修育成対象者の本務部分での業務負担を軽減するために、本人と専門性が近い教員（特任助教）をセンターに配置し、対象者が研修に割くことができるエフォートの確保に努めた。補助教員は次期の研修育成対象者としての研修参加を予定しており、近くで研修参加者の様子を見ることで自身の研修参加に対する準備期間とすることができたものと思われる。第二に社会データ構造化センターが運営管理する公的ミクロ統計データのオンサイト解析室の環境整備を進め、研修参加者、参加者のサポート役割を持ち次期研修対象者となる教員、一般ユーザーの利用を想定したPCの更新を行った。

### 東京大学①

#### 【情報学環・学際情報学府】

令和5年度（2023年度）に引き続き、対象者への良好な研修環境として、研究室内研究員室に専用のデスクとともに、専用の計算機環境、インターネット環境等を整備している。また、研修に集中出来るように、予算の執行、物品調達、出張処理等の事務処理は、研究室秘書がサポートしている。また、通常の研究業務の用いる、クラウド環境も大学標準のもの（Google Cloud、Office 365）以外でも、研究室専用のも（Office 365、Github、Cosense、WordPressなど）も提供している。また、大容量ストレージを備えたブロックチェーン用サーバーと、生成AIに対応した推論マシン環境も整備した。ブロックチェーン用サーバーは、エコシステム全体の統計的分析に資するデータ収集に活用し、推論マシンは、LLMの推論結果の信頼性を高めるための仕組みの試作・検証などに用いている。加えて、機械学習を行う上で不可欠なデータを参加者間で共有するためのインフラである「データスペース」に関する国際シンポジウムにも参加し、実際のデータ利活用に関する知見を深めた。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備⑥

### 東京大学②

#### 【工学部】

第2期研修育成対象者が研修において習得した統計的知見を活用するための環境整備を進めた。具体的には、研修において習得した方向統計学の知見を研究教育において活用するために、近年都市計画分野でも注目されているGPSを利用した人流データの利用環境整備を目的として、大規模なデータを処理可能なワークステーション（BTOパソコン）を本委託事業経費にて購入した。このような研修環境の整備を行った結果、実際に方向統計モデルをベースとした人流データの集計手法を開発し、この計算環境を利用して処理を行い、地理情報システム学会にて研究成果を口頭発表するという成果が得られた。

人流データを利用したさらなる研究発展および教育環境整備のために、株式会社プログウォッチャー社から東京都豊島区および大阪府大阪市の複数時点における人流データを本委託事業経費にて購入した。対象地および対象期間は、都市計画や地理の分野で重要性が高い都市再開発・都市再生の文脈において実践的な問題意識に即した分析環境整備を目的として、都市再開発が人流に与える影響を分析できるように選定した。これにより研修育成対象者や学生が希少な人流データを分析することが可能となり、学生にデータ分析を通じたスキル習得をさせる環境を整備することができた。

### 東京理科大学①

第2期研修生として派遣された助教1名は、薬学部生命創薬科学科から選ばれた若手教員である。統計・データサイエンスの内容を含む授業（学部生・大学院生対象）を担当している。所属する研究室においては、学部学生・大学院生に統計関係のアドバイスを行った。また、当該研修生は本学総合研究院データサイエンス医療研究部門のメンバーとして、研究部門の修士や博士課程大学院生の研究活動やシンポジウムで指導的アドバイスも行っている。同研修生は、がん幹細胞の非対称分裂を起点としたがんの不均一性獲得機構や乳がんの晩期再発とがん細胞休眠の詳細についてデータサイエンス手法と実験手法を融合するかたちで研究を進めており、その研究内容（統計解析を含む）の成果については、2024年度統計関連学会連合大会等の学会で発表した。また、担当する統計関連の大学院講義で博士課程学生に講義を行うとともに、学部3年生対象の講義も行った。自身の研究成果と研究に用いる統計手法を上記の大学院科目や演習科目で大学院生に教育・研究指導をした。その環境整備として、技術員を1名雇用し、同研修生の実験を補佐した。また、研究を進める上で必要となるがん幹細胞のRNA等を定量するためにNano Drop OneC装置を購入し、同研修生の研修環境の整備を進めた。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備⑦

### 東京理科大学②

第3期研修生として派遣された助教1名は、薬学部薬学科から選ばれた若手教員である。所属する研究室では、医療ビッグデータを用いたドラッグ・リポジショニング研究や医療ビッグデータを用いた大腸がん予防に関する研究などを行っているが、当該研修生はそれだけでなく、新たにAIを活用した漢方薬の新規情報提供システムの開発や機械学習を用いた漢方の証及び処方予測モデルの構築も進めている。また、大学院生の育成では、修士相当の学部5、6年生（薬学科）、修士学生（薬科学専攻）、及び博士課程学生（薬学専攻、薬科学専攻）の研究や特別実験などの統計研究指導を行っている。疾患予防・治療の新たなエビデンス創出を目指して、実験とデータサイエンスでくすりを育てる「育薬研究」を進めた。研究に用いる統計手法については研究室大学院生および学部生に教育・研究指導をした。また、令和7年度（2025年度）より統計関連の大学院科目を新たに担当することとなり、講義内容を作成した。

実験研究において、医薬品の体内動態を定量的に把握し、血中濃度等を測定してデータをとるために必要な固相抽出カラムやHPLCカラムなどを購入し、またデータサイエンス研究において、医療ビッグデータを用いて解析するためのPCを購入して研究環境の整備を進めた。さらに、これらの成果を英文誌へ投稿するための英文校正費、オープンアクセス費用として委託費を利用し、更に研修の推進や研修での発表のために必要な備品や書籍等を購入することにより、研究環境の整備を十分に行った。

### 同志社大学

第2期研修に派遣している育成対象者を支援するため、プロジェクト支援員およびTAを雇用し、育成対象者の担当講義の補助および担当共同研究の補助に従事させた。また、育成対象者の成果発表のための経費（英文校正、出張旅費等）の補助を行い、合わせて、共同研究用計算機の購入も行った。これらの包括的な支援を行ったことにより、育成対象者は研修活動および自身の研究・教育活動に専念でき、従来以上の研究成果を生み出すとともに、教育の場における貴重な経験を積むことが可能となった。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備⑧

### 名古屋市立大学

令和6年度（2024年度）は、育成対象者の研修を円滑に進めるとともに、今後の教育・研究の発展にもつなげることを目的として、以下のとおり環境整備を行った。ノートPCを2台購入し、大学ゼミ生および大学院生への研究指導に活用した。また、研究室内に研究用の席を1つ増設し、それに伴いデスクトップPC1台等を整備した。さらに、今後の研究手法の拡充を見据え、機械学習にも対応可能なGPU搭載ノートPCを1台導入した。

人件費については、育成対象者が研究に専念できるよう、事務作業や資料整理を担うアルバイトスタッフを1名雇用した。これにより、業務の負担軽減と研修・研究活動の円滑化が図られた。また、研修対象者の研究フィールドであるパラオ共和国へ1度渡航し、現地での打ち合わせや研究成果のフィードバックを実施した。これらの取組により、今後の教育・研究活動に資する基盤が着実に構築されつつある。得られた研究成果については、国内外の学会で発表を行った。

### 一橋大学

本学より第3期研修育成担当者として参加しているソーシャル・データサイエンス研究科の准教授の研修環境整備として、研修に使用する必要な機材の購入を行った。これにより、基礎的な内容から高度な統計処理に関する知見を育成対象者が得られる環境を整えることができた。育成対象者はこうして得た知見を活かして、本学のソーシャル・データサイエンス学部2・3年生向け講義「回帰分析 I」を担当し、本学における統計教育の一翼を担った。

加えて研修で得られた知見を活かして論文執筆を行い、International Studies Quarterlyへ投稿を行った。また育成対象者は、計量・数理政治学会(JSQPS)やAmerican Political Science Association (APSA)で発表を行い、国内外の統計学者からコメントを貰うことで統計教員としての能力を向上させた。

### 広島大学①

- ・令和6年度（2024年度）に2名の研究支援員を委託費から人件費を拠出することにより雇用し、研修プログラムの学習や研究活動に必要な物品・史資料の選定や購入における支援や物品資料の管理や整備等の支援を行ってもらった。
- ・研究支援員には、当参画機関が主催する公開研究会における会場の整備やオンライン環境での録画や映像・音声切替などの支援を行ってもらった。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備⑨

### 広島大学②

- ・研究支援員には、当参画機関が発行する学術機関誌『高等教育研究叢書』([https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/research\\_book/](https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/research_book/)) およびディスカッションペーパー ([https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/research\\_activities/international-joint/paper/](https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/research_activities/international-joint/paper/), Web版オンリー) の編集校正出版支援を行ってもらい、研修の各種成果を迅速且つ柔軟に発信できる環境整備を進めた。
- ・研修参加者は、研修に関わる各種史資料の収集整備やこれら資料をも元に研修成果としての各種作成コンテンツを発表するために、事業実施費を執行することにより、国立国会図書館、東京大学、北海道大学、京都大学、滋賀大学等への出張を行った。これにより、研修成果を生かすことのできる教育学・高等教育学領域における具体的な事例の収集を行い、成果発表に生かすことができた。

### 北海道大学①

#### 【保健科学研究所所属の育成対象者】

令和6年度(2024年度)においては、第2期研修育成対象者の研修環境の整備を目的として、短期支援員3名を雇用し、育成対象者の業務負担軽減と研修時間の確保に向けた取組を行った。支援員は、日常的な業務や臨床実習に伴う事務作業、さらに研究活動におけるデータの取得・整理等を担い、育成対象者がより多くの時間を研修に充てられる体制を整備した。

また、育成対象者および短期支援員の業務に必要な情報機器や作業環境を整備した。具体的には、育成対象者の研究活動や統計研修における作業効率向上を目的としてノートパソコンを導入し、支援員の作業環境の確保にも活用した。加えて、大学院生の統計的課題に対応するために開設された統計相談コーナーにおいては、対話形式での支援と高負荷な統計計算に対応可能な性能を備えたデスクトップパソコンを整備した。さらに、北海道大学の教育システム(ELMS)内に新たに開設した統計学習支援グループでは、研修参加教員が作成したプレゼンテーションや動画教材等の電子資料を安全かつ効率的に保存・共有するため、ネットワーク対応のストレージ(NAS)を整備した。これにより、資料の一元的管理とバックアップ体制を確保し、継続的な教育資源の提供が可能となった。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備⑩

### 北海道大学②

#### 【経済学研究院所属の育成対象者】

令和5年度（2023年度）に引き続き、研修生が活動するうえで必要な機材の整備を行い、研修に取り組む環境を整えた。また、研修生の業務負担を軽減するため、ティーチングアシスタントを継続雇用した。

令和6年度（2024年度）は研修生が将来的に学部また修士課程において統計学関連科目の担当また研究指導を行うことができるよう本学学部1年生向けの全学教育科目「統計学」を担当し前期と後期に計2科目開講し、計180名の学生を指導するとともに、講義準備段階から博士後期課程所属の統計学を主専攻としているティーチングアシスタントと議論し、指導方法や資料などについてフィードバックを得る機会を得ている。また、これまで統計学の講義で使用していた資料に研修で得た知識を組み込んで作成した資料は、学生からも高評価を得た。

講義資料等の作成や事業実施に関し、統計学の知識を必要とするため、情報収集やデータ分析のため、統計数理研究所に訪問し、図書館や施設を利用した。また、北海道大学・滋賀大学・上智大学で行われた中間報告会に参加し、シニア教員や研修生との交流を通じ意見交換を行うとともに、メンター教員・グループ内の研修生とIntroduction to Statistical LearningのPython版の教材を作成し公開した。

### 立正大学

統計エキスパート育成システム構築・推進に向け、今年度は、第3期研修に1名参加し、第4期研修においても1名参加する事が決定した。引き続き統計エキスパートの育成を推進することとし、委託費により研修者の担当授業で用いる統計学関連書籍および各種データベースを利用できるように環境を整備した。

## (2) 第2期・第3期研修育成対象者の研修環境の整備⑪

### 早稲田大学

#### 【第2期研修育成対象者の研修環境の整備】

育成対象者が本研修に専念できる環境を整備した。本センターでの育成対象者の業務範囲は広く、学内向けオンデマンド講義の構築および運用や学外企業・他大学と連携したデータ科学研究教育の推進などがある。令和6年度は以下2つを目的とした環境を整備した。

- 1) 育成対象者の研究環境整備：研究環境整備の目的で、分析データの収集整理用のノートPCとその関連用品を購入した。また共著者や学内教員との遠隔会議を円滑にするためのウェブカメラや電子黒板を購入した。その他研究遂行に必要な用品、前作業の外部委託などを行った。
- 2) 育成対象者の研修時間確保のための他教員講義資料等作成環境整備：研修対象者の時間確保のためセンター内他教員が複数名で研修対象者の業務を代替している。この業務を効率化するための環境を整備した。具体的には、研修対象者の業務としていた既存科目の英語化を代替、オンデマンドコンテンツ作成を効率化するためのディスプレイやタブレット型PCおよびその関連用品を購入した。また新規科目の立ち上げおよび既存科目改良に必要な書籍を購入した。

#### 【第3期育成対象者研修環境の整備】

前述の通り、本センターでの育成対象者の広い業務範囲の中で令和6年度は以下の環境を整備した。

- 1) 育成対象者の研究環境整備：研究推進のため生成AI（ChatGPT）および翻訳ソフト（DeepL）などソフトウェア利用環境を整えた。また研究発表費用として論文掲載費も計上している。
- 2) 育成対象者の研修時間確保のための他教員講義資料等作成環境整備：研修対象者の時間確保のためセンター内他教員が複数名で研修対象者の業務を代替している。この業務を効率化するための環境を整備した。具体的には、研修対象者の業務としていた既存科目の英語化を代替、オンデマンドコンテンツ作成を効率化するためのノートPC、タブレットPCおよび関連用品やソフトウェア等を購入した。また新規科目の立ち上げおよび既存科目改良に必要な書籍を購入した。

## (3) サテライト研修施設の管理運営

### 滋賀大学

令和3年度(2021年度)に整備した統計エキスパート育成に係るサテライト研修施設について、教材作成や動画配信ができる環境を整備している。当該サテライトを中心に、令和6年度(2024年度)は5月16日(木)に「滋賀大学サテライト合同研修会」、11月27日(水)「第7回統計エキスパート人材育成中間報告会」、1月9日(木)に「滋賀大学サテライト合同研修会」の開催や、研修対象者やメンター教員の教育研修スペースとして活用している。

当該サテライト施設の運営にあたっては、データサイエンスの幅広い分野をカバーするDS学部、DS・AIイノベーション研究推進センター所属の総勢50名の教員が関与した。学部・大学院での教育経験のみならず、これまでの企業・地方自治体等との共同研究・コンサルタント・社員教育を通じて得た、統計教育のノウハウを、共同研究演習・コンサルテーション演習など、サテライト施設における効果的な大学統計教員育成研修の実施方策の検討などに活かしてきたところである。



# 令和7年度（2025年度）事業計画

令和7年（2025年）5月28日  
統計数理研究所  
大学統計教員育成センター

# I 令和7年度（2025年度）事業計画の構成等

## 令和6年度（2024年度）

- ① コンソーシアムの運営
- ② 教育システムの情報提供
- ③ 第2期・第3期研修の実施
- ④ 第4期研修の企画・準備
- ⑤ 自己点検・中間評価を踏まえた**今後の事業の検討**
- ⑥ 必要な環境整備

## 令和7年度（2025年度）

- ① コンソーシアムの運営
- ② 教育システムの情報提供
- ③ **第3期研修・第4期研修の実施**
- ④ **今後の事業の具体的な検討**
- ⑤ 必要な環境整備

## ■ 令和7年度（2025年度）の主なスケジュール

4月		第4期研修開講式・同第1クール開始
		第3期研修・第3クール開始
		先端的データサイエンス特論・先端的データ分析演習開講
5月	第22回コンソーシアム運営委員会、第5回総会	
6月	「統計数理」への投稿論文締切	第9回中間報告会（広島大学）
7月	第23回コンソーシアム運営委員会	
8～9月	第5回コンソーシアムワークショップ	統計関連学会（関西大学）等での発表
10月		第3期研修第4クール・第4期研修第2クール開始
11～12月		第10回中間報告会（滋賀大学）
12月	第24回コンソーシアム運営委員会	
2月		第11回中間報告会（中央大学）
3月		第3期研修修了式

## Ⅱ 令和7年度（2025年度）事業計画

### 1. コンソーシアムの運営（参画機関による統計エキスパートの育成・把握）

- 「コンソーシアム運営委員会」（四半期ごとに開催）を中心とする適切なマネジメントの下、産官学など社会全体のデータサイエンス・AI推進の要・基盤となる「統計エキスパート人材」の育成をコンソーシアム一体となって推進。
- 具体的には、参画機関の積極的な協力の下、「コンソーシアム総会」（年1回開催）における参画機関の取組状況報告やコンソーシアム・ワークショップ（令和7年（2025年）8月～9月）の充実に引き続き努め、参画機関ごとの特性を踏まえた統計エキスパート育成をコンソーシアムとして支援。また、**参画機関における「統計エキスパート」の令和7年度（2025年度）の育成状況**を、共通の要件で把握し、コンソーシアムとして**取りまとめ・公表**。
- 「コンソーシアム運営委員会」について、「**2年ごとに委員の定期的な見直し**」を行うことの明確化を図るとともに、委員改選の考え方を検討・整理した上で、**令和8年（2026年）4月改選に向けて準備**。

#### 参画機関が育成する「統計エキスパート」の要件

- ① 大学統計教員育成研修の修了者・育成対象者（教員）から、学術論文や研究における統計学活用について**実質的な指導を受け、修士論文合格・学会発表等の研究成果**をあげた者（大学院修士課程学生等）
- ② 当該教員の**統計学に関連する講義を複数科目、履修・修了した者**（同上）

## 2. 教育システムの情報提供

- 繰り返しの模擬講義を中心とする大学統計教員育成研修の特徴的な育成システム（参考1参照）や使用教材の情報等を参画機関と共有し、参画機関における統計エキスパート育成に向けた教材・カリキュラムの改善検討を引き続き支援。第1期・第2期研修修了生に対し、研修設備の継続使用を可能とするなど、研修修了後も支援。
- 参画機関の取組を更に支援するため、大学統計教員育成研修の**オンライン講座の一部について、試行的に参画機関に公開**するとともに、コンソーシアム・ホームページ「会員サイト」において、第3期研修生による「**統計学基礎 教材集2026**」の作成・公開を準備。

## 3. 第3期・第4期研修の実施

- 同時並行的に実施される第3期・第4期研修の完遂に向け、**メンターを1名増員**（参考2参照）するとともに、所属参画機関において育成対象者が研修に専念できる環境を整備できるよう、可能な限り支援。
- **第3期大学統計教員育成研修**の研修生13名（参考3参照）の令和7年度末修了に向け、**第3クール**（令和7年（2025年）4月～9月）及び**第4クール**（令和7年（2025年）10月～令和8年（2026年）3月）においては、育成対象者自身の研究や所属参画機関における統計エキスパート育成に活用できるよう、第1クール及び第2クールで培った力をさらに伸ばし、各種学術分野の融合を含む**共同研究演習、教材開発演習及びコンサルテーション演習**を含めた研修を実施するとともに、所属参画機関においても、育成対象者のファカルティ・ディベロップメント活動などを展開。
- **第4期大学統計教員育成研修**の研修生11名（参考4参照）に対し、第3期以前と同様の研修を実施。**第1クール**（令和7年（2025年）4月～9月）及び**第2クール**（2025年10月～令和8年（2026年）3月）においては、統計ベースライン特習、統計教育力育成演習及び統計研究力強化演習から構成される「**基礎科目**」を中心に**研修**し、先端的データサイエンス特論や先端的データ分析演習等で不足している知識を補い、**統計学の知識基盤を確立**。

### 質保証された大学統計教員育成研修の実施スケジュール

第3期：令和6年（2024年）年4月 ～ 令和8年（2026年）3月

第4期：令和7年（2025年）年4月 ～ 令和9年（2027年）3月

} 各期4クールで、  
基礎から発展、個別科目へ

## 【参考1】 大学統計教員育成研修 研修イメージ

### 中核機関（統計数理研究所）

A：統計ベースライン特習  
全体研修＋グループ研修  
繰返しの講義体験

### 参画機関

C：統計研究力強化演習  
参画機関におけるFD活動

達成度管理WG

個別科目：コンサルテーション演習、教材開発演習、共同研究演習  
＋先端的データサイエンス特論、先端的データ分析演習

### 中核機関（統計数理研究所）

B：統計教育力育成演習  
全体研修＋メンターとの集中研修、模擬講義（公開）

目標：修士課程学生に4科目の講義ができる  
基本的な統計学の講義、発展的な統計学の講義  
専門分野と統計学が融合した講義（2科目）

## 【参考2】 第3期・第4期大学統計教員育成研修のメンター体制

氏名	最終学歴・学位	主な職歴・社会貢献
岩崎 学	東京理科大学大学院理学研究科修士課程修了。理学博士。	横浜市立大学データサイエンス学部教授・学部長。統計関連学会連合会理事長、日本統計学会会長・理事長、応用統計学会会長。
折笠 秀樹	米国ノースカロライナ大学生物統計学科博士課程修了。学術博士Ph.D.	富山大学医学部教授。日本臨床薬理学会評議員、日本計量生物学会評議員。
国友 直人	Department of Statistics and Department of Economics, Graduate School, Stanford University (Ph.D. in Economics, Advisor: T.W. Anderson)	東京大学経済学部教授・学部長、明治大学政治経済学部教授。日本統計学会会長、内閣府社会経済研究所研究員。
佐藤 俊哉	東京大学大学院医学系研究科保健学専攻博士課程修了。保健学博士。	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻医療統計学教授。日本計量生物学会会長・理事、日本薬剤疫学会評議員。国際計量生物学会Council member
清水 邦夫	東京理科大学大学院理学研究科数学専攻博士課程中途退学。理学博士	東京理科大学理学部教授、慶應義塾大学理工学部教授。応用統計学会会長。
神保 雅一	東京工業大学理工学研究科情報科学専攻修士課程修了。理学博士。	慶應義塾大学理工学部・理工学研究科教授、名古屋大学大学院情報科学研究科教授。日本統計学会代議員、応用統計学会監事。
中西 寛子	北海道大学大学院工学研究科情報工学専攻博士後期課程修了。工学博士。	成蹊大学経済学部教授、成蹊学園常務理事。日本統計学会理事・監事、応用統計学会副会長、品質管理学会代議員。
水田 正弘	北海道大学大学院工学研究科情報工学専攻博士後期課程修了。工学博士	北海道大学情報基盤センター教授。日本計算機統計学会会長、応用統計学会副会長。
三輪 哲久	東京大学大学院工学系研究科計数工学専攻修士課程修了。工学博士。	独立行政法人農業環境技術研究所生態系計測研究領域長。応用統計学会副会長、日本計量生物学会理事。

### 【参考3】 第3期研修 育成対象者13名のメンター配置

所属参画大学	学位	メンター	副メンター
順天堂大学	博士（医学）	岩崎 学	折笠 秀樹
慶応大学	博士（医療マネジメント学）	折笠 秀樹	岩崎 学
DS施設	博士（理学）	国友 直人	岩崎 学
早稲田大学	博士（理学）	国友 直人	岩崎 学
上智大学	博士（工学）	清水 邦夫	水田 正弘
東京理科大学	博士（薬学）	清水 邦夫	水田 正弘
滋賀大学※	博士（情報学）	神保 雅一	中西 寛子
滋賀大学※	博士（理学）	神保 雅一	中西 寛子
岡山大学※	博士（学術）	中西 寛子	神保 雅一
広島大学※	博士（教育学）	三輪 哲久	水田 正弘
茨城大学	博士（農学）	三輪 哲久	水田 正弘
群馬大学	博士（理学）	水田 正弘	三輪 哲久
立正大学	博士（理学）	水田 正弘	三輪 哲久

「※」印を付した参画機関の育成対象者は、滋賀大学サテライトの研修が中心

## 【参考4】 第4期研修 育成対象者11名のメンター配置

所属参画大学	学位	メンター	副メンター
立正大学	博士（総合学術）	岩崎 学	折笠 秀樹
東京学芸大学	博士（学術）	折笠 秀樹	岩崎 学
東京理科大学	博士（工学）	折笠 秀樹	岩崎 学
DS施設	博士（経済学）	国友 直人	中西 寛子
東京理科大学	博士（経済学）	国友 直人	中西 寛子
極地研究所	博士（理学）	清水 邦夫	中西 寛子
中央大学	博士（理学）	清水 邦夫	中西 寛子
滋賀大学 <sup>※</sup>	博士（学術）	神保 雅一	佐藤 俊哉
名古屋大学 <sup>※</sup>	博士（医学）	佐藤 俊哉	神保 雅一
九州大学	博士（数理学）	三輪 哲久	水田 正弘
群馬大学	博士（理学）	水田 正弘	三輪 哲久

「※」印を付した参画機関の育成対象者は、滋賀大学サテライトの研修が中心

## 4. 今後の事業の具体的な検討

- 令和4年度（2022年度）に中核機関が実施した自己点検及び令和5年度（2023年度）に文部科学省「統計エキスパート人材育成プロジェクト推進委員会」が実施した中間評価の結果や、本プロジェクトを取り巻く環境の変化等を踏まえ、コンソーシアム運営委員会を中心に会員機関が連携して、**本プロジェクト期間終了後も、研修修了者が中核となって所属機関で統計エキスパート人材の育成を継続的・効果的に進める。**このため、研修修了者に対して、①コンソーシアムへの「**特別会員**」としての加入、②統計数理研究所の正式称号「**客員准教授**」、「**客員助教**」などの付与、③**共同研究演習の継続・発展**など、コンソーシアム・中核機関が**支援を継続**する。さらに、参画機関における統計エキスパート人材の育成状況について、コンソーシアムとして令和12年度まで把握を行い、**適切な人材育成が継続して行われていることを確認**しつつ必要に応じて**助言**を行うなど、統計エキスパート人材育成エコシステムの継続的・効果的な推進を図る。
- **今後の新たなプロジェクトの具体化に向け、文部科学省と連携・協力**しつつ、本プロジェクトのノウハウや成果等を活かし、コンソーシアム運営委員会を中心に検討。

## 5. 必要な環境整備

- 中核機関において、**自己負担の増加**も図りつつ、上記1.から4.の取組に必要となる**シニア教員などの体制を確保**するとともに、参画機関における研修環境整備などの取組を可能な限り支援（参考5参照）。
- コンソーシアム・ホームページの掲載情報の充実を図るなどして本プロジェクトの社会的な認知度の向上に努めるとともに、統計関連学会連合大会における育成対象者の発表（令和7年（2025年）9月）などを通じて、研修成果を広く周知。
- 大学統計教員育成研修の成果を広く公表するため、「**統計数理**」（74巻1号。令和8年（2026年）6月刊行）の特集テーマとして「**統計エキスパート人材育成プロジェクト**」を設定し、育成対象者の投稿論文を掲載。

## 【参考5】 令和7年度（2025年度）事業予算の概要

(単位：千円)

費 目	補助事業費			備 考
	令和7年度 (2025年度) 申請時予算案	令和6年度 (2024年度) 申請時予算	令和6年度 (2024年度) 執行見込み	
直接経費	<b>180,000</b>	240,000	240,000	
設備備品費	<b>600</b>	800	639	交付予定額を踏まえて、 節約ベースの申請額に変更
人件費	<b>91,896</b>	103,812	101,105	交付予定額を踏まえて、 中核機関の自己負担を増額
事業実施費	<b>87,504</b>	135,388	138,256	交付予定額を踏まえて、 節約ベースの申請額に変更
間接経費	<b>54,000</b>	72,000	72,000	交付予定額を踏まえた変更
合 計	<b>234,000</b>	312,000	312,000	

※ 「令和6年度（2024年度）執行見込み」については、今後、変更があり得る。

## 資料3



# 統計エキスパート人材育成の強化に向けて

## -今後のコンソーシアム活動の方向について-

令和7年5月28日  
統計数理研究所  
大学統計教員育成センター

# 【プロジェクト創設後の環境変化】

- 本プロジェクトは、データサイエンスの基盤となる**統計学の教育体制が米国等に比して大きく立ち遅れる中、統計教育を担う高度な研究教育人材（統計学教員）を育成するため、令和3年度に創設**

## 統計エキスパート人材育成プロジェクト

～ポストコロナ社会における研究のDXの実現のための基礎となる人材の育成～

資料1

令和3年度予算額 313百万円（新規）



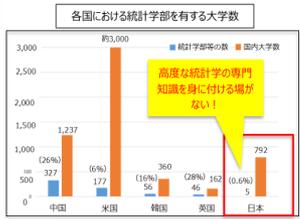
### 背景・課題

- ✓ ポストコロナ社会における研究のDXの鍵となるデータの利活用のためには、大量のデータを分析・解析するための統計人材が必要不可欠であり、データ駆動型研究の推進に伴って、統計的素養を十分に有していないと対処できない課題（リアルタイムビッグデータ解析等）への対応の需要も増している。
- ✓ しかしながら、他国における統計学部を有する大学数（米国では177大学）に比べて、我が国では5大学（滋賀大、横浜国立大、武蔵野大、広島大、長崎大）しかなく、高度な統計学の専門知識を身に付ける場が非常に少ない。
- ✓ そのため、米国等に比べて、我が国の統計研究の人材は少なく、高度な統計学のスキルを有する人材の育成及び統計人材育成エコシステムの構築は急務。

### 【経済財政運営と改革の基本方針2020（令和2年7月17日閣議決定）】

- STEAM人材の育成：研究、教育・研究現場のデジタル化・リモート化、研究施設の整備、国内外の大学や企業と連携した遠隔・オンライン教育を推進するとともに、データサイエンス教育や**統計学に関する専門教員の増員**、**自身体制を整備する**。

### 【現状】



○ 諸外国に比して我が国の大学における統計学部数は少ない



○ 他国の統計学会員数が増加傾向にあるのに対して、我が国は横ばいの傾向

統計教育・研究の強化が急務

### 【事業概要】

大学共同利用機関・大学等が**コンソーシアム**を形成し、大学等における**統計学の教育研究の若手の中核人材の育成を行う取組を公募**により国が支援（1コンソーシアム程度・支援期間5年）



- 中核機関は人材育成プログラムを開発
- 中核機関は、参画大学等の若手研究者（経済、心理、公衆衛生等、統計学を活用する専門分野の研究者）を、人材育成プログラム＋共同研究により、統計学のエキスパートに育成
- 育成された若手研究者は、各参画大学等において、統計学の教育・研究の中核となり、参画大学等において統計研究を振興するとともに、統計学のエキスパートを育成。米国等諸外国に伍する体制を目指す。

## ➤ 「データサイエンス系学部・学科」の新設ラッシュ

～ DS系学部学科の設置校の数：  
4大学（2020年度）  
⇒ 40大学（2025年度）

## ➤ 「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」認定校の急増

～ 「リテラシーレベル」認定校の数：  
0大学（2020年度）  
⇒ 390大学（2024年度）

- ◆ わが国には、これまで、米国等の諸外国に設置されている統計学部が存在しなかったため、DSの基盤となる**統計学教員が不足し、ニーズが急増**しており、体系的に統計学全般を教え、データ分析等の研究指導を的確に行うことのできる**高度統計人材の育成が急務**

- ～ 大学教員の求人公募数：「統計」(128件)は「機械学習」(37件)や「情報科学」(67件)を大きく上回り、増加（2025年 科学技術振興機構）
- ～ 全国の国公私立大学のうち、数理教育は53%、データサイエンス・AI教育は62%で教員が不足（2023/9/26 日本学術会議見解）

# 【現行プロジェクトの実績・評価を踏まえた今後の方向性】

- 現行プロジェクトでは、当初の目標（30名）を大きく超える**38名を対象にした計3期の研修実施**に加え、参画機関のニーズに応じて**第4期研修**（令和7～8年度）の完遂を決定（中核機関の自己財源も覚悟）
  - ～参画機関数は、コンソーシアム設立後に、**21→30大学等に拡大**  
（北海道大学から九州大学まで、幅広く全国の大学等が参画）
  - ～計3期の研修には、参画機関から毎期、**募集数を超える応募**  
プロジェクト期間外を含む第4期研修（研修生11名）においても同様
  - ～海外著名大学テキストを使用し、繰り返し講義体験を中心とする現在の研修システムについて、「人材育成法のモデルケース」、「教員として大きく成長」など、**参画機関の大学は高く評価**
  - ～本研修の修了生・研修生は、データサイエンス系学部の新設校に転籍するなど、**コンソーシアム外の大学からも高く評価**され、キャリアアップ



- ◆ 一層深刻化する**統計学教員の不足**への対応を始め、**広く社会から求められる統計エキスパート人材の育成**を更に強化することが必要
- ◆ このため、現行プロジェクトの教材・カリキュラム等の成果を活かしつつさらに発展させるとともに、統計エキスパート人材に対する社会のニーズに適切に対応することができるよう、**国の支援の下、新たな取組の展開が必要**

# 【人材育成の強化に向けた新たな取組イメージ】

## 【コンソーシアムにおける統計エキスパート人材育成の強化に向けた基本的な考え方】

- ✓ データサイエンス系学部設置校やDSプログラム認定校との連携を強化し、統計学教員等の統計エキスパート人材の育成ニーズに対応
- ✓ 中核機関を中心に、大学統計教員育成研修を軸として**大学統計教員等を育成**  
研修参画機関から高い評価を得ている「教材」や「繰り返し講義体験」などの人材育成ノウハウの活用などにより、人材育成の拠点となる参画機関を支援
- ✓ 人材育成の拠点となるいくつかの参画機関を中心に、**モデルケース**となるような統計エキスパート人材育成の取組を中核機関と連携して推進  
(その後、確立したノウハウを基に、統計エキスパート人材育成の取組を全国に展開し、統計エキスパート育成エコシステムの完成を目指す)



## 【人材育成強化に向けた取組の例】

- ✓ 現行の大学統計教員育成研修に相当する「総合課程」（2年間）に加えて「基本課程」（1年間）を創設し、階層的研修を導入 ⇒ **2段階水準の統計教員を育成、育成者数を倍増**
- ✓ 社会人等を対象とする**短期集中講座等の実施**により、産業界等のニーズに対応して活躍する統計エキスパート人材を育成
- ✓ 統計学担当の統計専門外教員に対する短期研修等の再教育 など

# 【新たな取組が実現しなかった場合の対応】

## 第4期育成研修

- ◆ 第4期大学統計教員育成研修・2年目は、中核機関の経費負担により完遂。ただし、研修代替委託費は配分できない状況。

※ 研修の実施に必要なとなる旅費等は中核機関にて直接執行。

## コンソーシアムの活動

- ◆ KPI（10年で統計エキスパート500名育成）確認などのため、当分の間、コンソーシアムは存続。
- ◆ 参画機関による情報共有の場として年1回の総会をZoom開催、コンソーシアムHPは当面維持。
- ◆ この活動の一環として、2026年度以降も各参画機関から成果報告書を徴収・共有。
- ◆ 第1期～第4期研修修了者に対しては、引き続きコンソーシアムとして支援を継続。

## 2025年度コンソーシアム運営委員会の体制

2025年5月

### 【中核機関】

山下 智志 (統計数理研究所長) 【委員長】  
川崎 能典 (統計数理研究所副所長)  
千野 雅人 (統計数理研究所 大学統計教員育成センター長)  
中西 寛子 (大学統計教員育成センター研修部長・研修主幹)  
水田 正弘 (同センター 研修部 教育システム開発主幹)

### 【参画機関】

鈴木 讓 (大阪大学 数理・データ科学教育研究センター センター長)  
梶原 健司 (九州大学 マス・フォア・インダストリ研究所 所長)  
青木 悠樹 (群馬大学 数理データ科学教育研究センター センター長)  
佐藤 健一 (滋賀大学 データサイエンス学部 教授) 【委員長代理】  
宿久 洋 (同志社大学 大学院文化情報学研究科 教授)  
赤倉 貴子 (東京理科大学 データサイエンスセンター センター長)  
渡部 敏明 (一橋大学 ソーシャル・データサイエンス研究科 科長)  
松嶋 敏泰 (早稲田大学 データ科学センター 所長)

### 【事務局】

澤村 保則 (統計数理研究所 大学統計教員育成センター 統括部長)

特別会員の追加等（コンソーシアム規約別表の一部改正）

新	旧
<p>別表 参画機関及び協力機関（<u>2025.4.1</u> 改正）（第4条第2項）</p> <p>参画機関 （略）</p> <p>協力機関 （略）</p> <p>特別会員 （第1期大学統計教員育成研修 修了者）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 石橋 健（関西大学）</li> <li>・ 加葉田 雄太朗（長崎大学）</li> <li>・ 姜 佳明（長崎大学）</li> <li>・ 佐藤 宏征（東京科学大学）</li> <li>・ 田島 友祐（<u>大妻女子大学</u>）</li> <li>・ 趙 宇（東京理科大学）</li> <li>・ 土田 潤（京都女子大学）</li> <li>・ 長井 万恵（群馬大学）</li> <li>・ 中野 義雄（東京理科大学）</li> <li>・ 橋本 大志（国立極地研究所）</li> <li>・ 松島 裕康（滋賀大学）</li> <li>・ 湯浅 良太（千葉大学）</li> </ul> <p>（第2期大学統計教員育成研修 修了者）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>大野 航太（中央大学）</u></li> <li>・ <u>岡本 雅子（京都大学）</u></li> <li>・ <u>小野島 隆之（滋賀大学）</u></li> <li>・ <u>江 啓発（名古屋市立大学）</u></li> <li>・ <u>眞田 英毅（武庫川女子大学）</u></li> <li>・ <u>清家 大嗣（東京大学）</u></li> <li>・ <u>多森 翔馬（東京理科大学）</u></li> <li>・ <u>張 天逸（早稲田大学）</u></li> <li>・ <u>中西 正（広島修道大学）</u></li> <li>・ <u>西 颯人（東京大学）</u></li> <li>・ <u>深作 亮也（九州大学）</u></li> <li>・ <u>吉田 一生（北海道大学）</u></li> </ul>	<p>別表 参画機関及び協力機関（<u>2024.10.1</u> 改正）（第4条第2項）</p> <p>参画機関 （略）</p> <p>協力機関 （略）</p> <p>特別会員</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 石橋 健（関西大学）</li> <li>・ 加葉田 雄太朗（長崎大学）</li> <li>・ 姜 佳明（長崎大学）</li> <li>・ 佐藤 宏征（東京科学大学）</li> <li>・ 田島 友祐（滋賀大学）</li> <li>・ 趙 宇（東京理科大学）</li> <li>・ 土田 潤（京都女子大学）</li> <li>・ 長井 万恵（群馬大学）</li> <li>・ 中野 義雄（東京理科大学）</li> <li>・ 橋本 大志（国立極地研究所）</li> <li>・ 松島 裕康（滋賀大学）</li> <li>・ 湯浅 良太（千葉大学）</li> </ul>

統計エキスパート人材育成コンソーシアム 第5回総会 参加者一覧

令和7年5月28日

【参画機関・特別会員】

茨城大学	大学院農学研究科・農学部	准教授	庄山 紀久子
大阪大学	数理・データ科学教育研究センター	センター長・基礎工学研究科教授	鈴木 讓
岡山大学	学術研究院 先鋭研究領域（資源植物）	教授	坂本 亘
〃	学務企画課		中島 雄二
九州大学	マス・フォア・インダストリ研究所	所長	梶原 健司
京都女子大学	学術研究支援部研究企画課		宗像 美香
京都大学	データ科学イノベーション教育研究センター	特定講師	岡本 雅子
群馬大学	数理データ科学教育研究センター	センター長	青木 悠樹
〃	食健康科学教育研究センター	准教授	長井 万恵
慶應義塾大学	大学院健康マネジメント研究科	教授	山本 涉
滋賀大学	大学院データサイエンス研究科	教授	佐藤 健一
〃	大学院データサイエンス研究科	准教授	松島 裕康
上智大学	大学院応用データサイエンス学位プログラム事務室		北村 紘一
総合研究大学院大学	統計科学コース	コース長	吉本 敦
中央大学	AI・データサイエンスセンター	事務長	石倉 孝一
データサイエンス共同利用基盤施設	社会データ構造化センター	センター長	前田 忠彦

データサイエンス共同 利用基盤施設	社会データ構造化センター		姉崎 沙紗佳
東京学芸大学	先端教育推進課	副課長	岩澤 大介
東京大学	数理・情報教育研究センター	センター長	駒木 文保
〃	大学院経済学研究科	教授	大森 裕浩
東京理科大学	データサイエンスセンター	センター長	赤倉 貴子
同志社大学	大学院文化情報学研究科	教授	宿久 洋
長崎大学	情報データ科学部	教授	植木 優夫
名古屋大学	医学部・医学系研究科経営企 画課		岩田 眞佐江
〃	〃		志賀 幾子
名古屋市立大学	大学院看護学研究科事務室	係長	毛利 周作
一橋大学	ソーシャル・データサイエン ス研究科	特任講師	佐野 仁美
広島大学	高等教育研究開発センター	教授	村澤 昌崇
立正大学	データサイエンス学部	教授	西崎 文平
早稲田大学	データ科学センター	教授	野村 亮
大妻女子大学	データサイエンス学部	講師	田島 友祐

※ 国立極地研究所、順天堂大学、東京科学大学、兵庫県立大学及び北海道大学については、学事等の関係によりご欠席。

#### 【協力機関】

※ 広島大学及び統計質保証推進協会は、学事等の関係によりご欠席

【中核機関】

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構	統計数理研究所		所長	山下 智志
	〃		副所長	川崎 能典
〃	統計数理研究所 成センター	大学統計教員育	センター長	千野 雅人
〃	統計数理研究所 成センター	大学統計教員育	統括部長	澤村 保則
〃	統計数理研究所 成センター	大学統計教員育	研修部長・研修 主幹・シニア教 員・特任教授	中西 寛子
〃	〃		教育システム開 発主幹・シニア 教員・特任教授	水田 正弘
〃	〃		シニア教員・特 任教授	国友 直人
〃	〃		シニア教員・特 任教授	佐藤 俊哉
〃	〃		シニア教員・特 任教授	清水 邦夫
〃	〃		シニア教員・特 任教授	神保 雅一
〃	〃		シニア教員・特 任教授	三輪 哲久
〃	〃		研修部・特任教 授	赤穂 昭太郎
〃	〃		研修部	高柳 昌芳
〃	統計数理研究所		管理部長	鈴木 修二
〃	〃		総務企画課総務 企画係長	茂木 諒平
〃	〃		総務企画課研究 推進係長	昨間 勲
〃	〃		総務企画課人 事・給与係長	笠川 勇将
〃	〃		運営企画本部員	木下 聡子
〃	統計数理研究所 成センター統括部	大学統計教員育		市原 順子

【会員以外の参加者】

文部科学省研究振興局参 事官（情報担当）付	学術基盤整備室	室長	土井 大輔
〃	〃	係長	濱崎 拓郎
〃	〃		野一色 伸
〃	〃		橘 風吉

2024年5月29日

## 第4回 「統計エキスパート人材育成コンソーシアム」総会 結果概要

【日 時】 2024年5月28日（火） 10:00～11:05

【場 所】 オンライン会議（ZOOMミーティング）

【参加者】 会 員： 中核機関、参画機関、協力機関及び特別会員（別紙の57名）  
来 賓： 文部科学省 研究振興局 参事官（情報担当）付 学術基盤整備室 土井室長  
ほか（別紙の4名）

### 【概 要】

#### ○ 開会挨拶

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 統計数理研究所 椿広計 所長より、コンソーシアム活動に対する関係者への謝辞とともに、今後の本プロジェクトが目指す方向性等について、以下の挨拶があった。

- ・ 第1期修了生の参画機関における活躍などの本プロジェクトの活動が、文部科学省による中間評価において高い評価を得たことは、研修参加者と所属参画機関のご協力の賜物と感謝。
- ・ 第1期修了生からは、この研修が厳しいものであった半面、有意義であるためレベルは維持する必要があるとの声も聴いている。高く評価された研修の質を維持しつつ、第2期・第3期の研修を進め、統計やデータサイエンスを基盤とする今後の諸学術の発展に貢献して参りたい。
- ・ 大学統計教員育成研修については、当初は5年間に3期の実施を予定していたが、中核機関及びコンソーシアム運営委員会での検討の結果、この灯を消すことなく、第4期の研修を実施する方針を決定。後継プロジェクトの実現に向けて、文部科学省のご指導・ご支援に加え、会員機関のご協力をお願いしたい。

#### ○ 来賓挨拶

文部科学省 研究振興局 参事官（情報担当）付 学術基盤整備室 土井 大輔 室長より、以下の来賓挨拶があった。

- ・ 近年の社会のデジタル化の進展と世界的なオープンサイエンスの潮流の中で、本年2月、「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」が決定。この中で、2025年度から新たに公募する科研費等の競争型研究について、論文とともにその根拠データの即時オープンアクセスが義務付けられ、データ駆動型研究が一層進展すると想定。そのような中で、大量かつ複雑なデータを分析・解析する統計人材の育成の重要性が、今後益々高まるものと考えている。
- ・ 本プロジェクトは、このような専門人材が我が国において不足している現状を踏まえ、統計数理研究所を中核機関とするコンソーシアムにより、令和3年度から推進しているもの。
- ・ 本プロジェクトの大学統計教員育成研修は、昨年9月に第1期研修が終了し、本年4月からは、昨年度開講した第2期研修と並行して第3期研修も開始。「3期で30名以上」という研修参加者の当初目標値を大きく超える大学統計教員の育成が本格化。この点については、

メンターの先生方の多大な努力に感謝。また、参画機関数も21機関から29機関に増加するなど、コンソーシアムの活動も多くの大学に拡大しているものと承知。

- ・ 第1期修了者の12名の若手研究者の皆様には、所属する参画機関において講義を開始されるなど、自身の教育・研究活動を進め各大学等で活躍されているものと承知。
- ・ 各参画機関においても、統計エキスパート育成システムの構築・推進に向け、講義内容の見直しや、教材作成、シンポジウムの開催など、様々な取組を積極的に進めているほか、研修参加者が研修に集中できるよう、専用居室や機器、サポート人材の確保などの取組を進めていると聞いている。
- ・ このような積極的かつ丁寧な取組の積み重ねが、日本統計学会活動賞の受賞にも繋がったものと、コンソーシアム関係者の尽力に感謝。
- ・ このようなコンソーシアムの活動成果を基に、昨年度実施された中間評価においては、「総合評価S」という高い評価を得た。本事業を通じて各機関等において持続的・発展的な人材育成の体制が構築されることを期待。
- ・ 文部科学省としても、中間評価の結果を踏まえ、引き続き、本取組への支援を行って参りたい。

## ○ 議 事

- ・ 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 統計数理研究所 椿広計 所長の議事進行により、以下の議題について審議した結果、会員からの異議や修正意見等は示されなかった。また、参画機関の取組状況について情報共有を行った。
  1. コンソーシアムの令和5年度（2023年度）活動報告について
  2. コンソーシアムの令和6年度（2024年度）事業計画について
  3. 第4期大学統計教員育成研修の募集について
  4. 特別会員の所属機関の変更、当面の運営委員会の体制について
- ・ この審議結果を受けて、「令和5年度（2023年度）成果報告書」の作成を進め、文部科学省に提出するとともに、令和6年度（2024年度）事業計画に沿って、第2期研修・第3期研修の実施と第4期研修の準備、研修修了者に対する支援など、コンソーシアムの活動を進めることとなった。また、コンソーシアム規約の改正と運営委員会体制の一部変更について、情報共有が行われた。

(以 上)

※文責：コンソーシアム事務局

## 別紙

### 統計エキスパート人材育成コンソーシアム 第4回総会 参加者一覧

令和6年5月28日

#### 【参画機関・特別会員】

茨城大学	大学院農学研究科・農学部	准教授	庄山 紀久子
大阪大学	大学院基礎工学研究科	教授	鈴木 讓
岡山大学	学術研究院 環境生命自然科学 学域学務企画課	教授	大下 洋一
九州大学	マス・フォア・インダストリ 研究所	所長	梶原 健司
京都女子大学	データサイエンス学部	学部長・研究所長	栗原 考次
	学術研究支援部研究企画課	課長	林 雅純
	〃	課員	宗像 美香
京都大学	データ科学イノベーション教 育研究センター	教授	林 和則
	〃	特定職員	寺川 雅
群馬大学	数理データ科学教育研究セン ター	センター長	青木 悠樹
	情報学部	副学長・教授	杉山 学
	食健康科学教育研究センター	准教授	長井 万恵
滋賀大学	大学院データサイエンス研究 科	教授	椎名 洋
	大学院データサイエンス研究 科	准教授	松島 裕康
順天堂大学	大学院医学研究科医科学専攻 医科学コースデータサイエン ス学位プログラム	データサイエンス学位 プログラム長・教授	青木 茂樹
	教務課大学院担当	課員	矢野目 大地

順天堂大学	教務課大学院担当	課員	浦 美由紀
上智大学	大学院応用データサイエンス 学位プログラム	学位プログラム委員長 補佐	大原 佳子
	〃	准教授	深澤 佑介
	〃 事務室		北村 紘一
中央大学	AI・データサイエンスセン ター	事務長	石倉 孝一
	〃		(接続者不明)
データサイエンス共同 利用基盤施設	社会データ構造化センター	センター長	前田 忠彦
東京理科大学	データサイエンスセンター	センター長	矢部 博
	〃	副センター長	瀬尾 隆
	〃	副センター長	村田 貴司
	〃	講師	趙 宇
	〃	専門員	犬伏 真理子
同志社大学	大学院文化情報学研究科	教授	宿久 洋
長崎大学	情報データ科学部	助教	加葉田 雄太郎
	〃	助教	姜 佳明
名古屋市立大学	大学院看護学研究科	教授	樋口 倫代
	〃 事務室	学務第2係長	毛利 周作
一橋大学	ソーシャル・データサイエン ス研究科	教授	七丈 直弘
	ソーシャル・データサイエン ス研究科事務室	事務長	岡田 大介

兵庫県立大学	情報科学研究科・社会情報科学部	副学部長・教授	笹嶋 宗彦
広島大学	高等教育研究開発センター	センター長	小林 信一
北海道大学	大学院経済学研究院	教授	高木 真吾
立正大学	データサイエンス学部	学部長	北村 行伸
	〃	教授	西崎 文平
早稲田大学	データ科学センター	所長	松嶋 敏泰
	〃	教授	野村 亮

※ 慶應義塾大学、国立極地研究所、総合研究大学院大学、東京医科歯科大学、東京大学及び名古屋大学については、学事等の関係により欠席。

#### 【協力機関】

※ 東京学芸大学、広島大学及び統計質保証推進協会は、学事等の関係により欠席

#### 【中核機関】

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構	統計数理研究所		所長	椿 広計
	〃		副所長	山下 智志
	〃		副所長	川崎 能典
	統計数理研究所 成センター	大学統計教員育 成センター	センター長	千野 雅人
大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構	統計数理研究所 成センター	大学統計教員育 成センター	統括部長	澤村 保則
	統計数理研究所 成センター	大学統計教員育 成センター	研修部長・研修 主幹・シニア教 員・特任教授	中西 寛子
	〃		教育システム開 発主幹・シニア 教員・特任教授	水田 正弘
大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構	統計数理研究所 成センター	大学統計教員育 成センター	シニア教員・特 任教授	岩崎 学

”	シニア教員・特任教授	清水 邦夫
”	シニア教員・特任教授	神保 雅一
”	シニア教員・特任教授	三輪 哲久
”	研修部・特任教授	神谷 直樹
統計数理研究所管理部総務企画課	副課長	橋本 渉
統計数理研究所 大学統計教員育成センター統括部	技術補佐員	市原 順子
”	”	荒木 美千代

【会員以外の参加者】

文部科学省研究振興局参事官（情報担当）付

学術基盤整備室

室長	土井 大輔
”	参事官補佐 吉田 雄介
”	係長 西村 佳高
”	係員 村上 史歩